

学位論文

題目 NHK テレビフランス語講座における「文化」の分析
—「テレビでフランス語」(2010年-2015年)を調査対象として—

指導教員 西山教行 教授

平成 29 年 1 月 13 日

京都大学大学院 人間・環境学研究科

修士課程 共生人間学専攻

氏名 魚住千晶

論文内容の要旨

共生人間学 専攻

氏名 魚住千晶

本稿は、テレビフランス語講座における「文化」を分析し、日本におけるフランス語学習者に対して、マスメディアがフランス「文化」をどのように発信しているのかを考察することを旨とする。

日本の大学の第2外国語において、フランス語を選択する学生はフランスの「文化」に対して強い興味を抱いている。したがって、テレビフランス語講座がどのような「文化」を伝えているのかを解明することは、学習者が表象するフランス「文化」の解明の手掛かりにもなり、「文化」に関心を持った学習者への効果的な文化教育を探るうえで、意義を持つ。

本稿では、フランス語教育の中の「文化」と日本人学生が抱くフランスの「文化」イメージを先行研究に依拠して整理したうえで、2010年から2015年のNHK「テレビでフランス語」の「文化」をCEFRの社会文化的知識項目を用いて分析する。

その結果、フランスは「憧れの、観光名所に満ち、文化が豊かな国」という漠然としたイメージが日本人学習者に定着しているものの、テレビフランス語講座はそれとは異なり、学習者が実際に体験しやすい日常生活の「文化」を発信していることが判明した。また、人間関係を形成する過程で重視される項目はほとんど扱われていないことも判明した。

また、取り上げられているフランス語圏の地域はフランス国内がほとんどで、中でもパリが多い。しかし、観光名所を中心とする憧れのパリではなく、地元住民の視点から見た日常のパリを取り扱うことに力を入れている。

「文化」の提示方法については、テレビフランス語講座は「文化」をVTRによる提示を用いて多く伝え、その次にスタジオの中での出演者の交流によって、学習者にその「文化」を意識させる方法で提示していることがわかった。

目次

0. はじめに.....	1
1. 研究背景	
1.1. フランス語教育における「文化」.....	2
1.2. 日本人学生が抱くフランス「文化」のイメージ.....	3
2. NHK テレビフランス語講座	
2.1. 教育テレビの歴史.....	6
2.2. NHK 語学講座の歴史.....	6
2.3. NHK テレビフランス語講座の歴史.....	7
3. 研究手法	
3.1. 研究対象.....	10
3.2. 分析方法.....	11
3.2.1. 「文化」の分類指標としてのCEFRの社会文化的知識.....	12
3.2.2. 内容分析の手法.....	12
4. 結果	
4.1. 番組で取り上げられている「文化」.....	16
4.1.1. 「文化」が放送内容に占める割合.....	16
4.1.2. 対象言語の「文化」.....	19
4.2. 対象言語の「文化」の提示方法.....	28
4.3. まとめ.....	30
5. 考察.....	32
6. おわりに.....	35
謝辞.....	37
参考文献.....	38
付録資料.....	42

0. はじめに

本研究は、NHK のテレビのフランス語講座(以下、テレビフランス語講座と略す)における「文化」を分析し、日本におけるフランス語学習者に対して、マスメディアがフランス「文化」をどのように発信しているのかを考察するものである。

本稿では文化を論じるにあたり、「文化」と書記することとする。ブルデュー(1996)は、「われわれが社会的現実とみなしているものは、かなりの程度まで、この語のあらゆる意味における *représentation*(表象)であるか、さもなければ *représentation* の産物」(p.90)だと看破し、社会的世界を扱う際の注意点を指摘している。したがって、ここで扱う文化もまた我々が社会的現実とみなしているものであり、実態ではなく、表象の産物であることを示すため、「文化」と表記する。

堀(2014)と日本フランス語フランス文学会・日本フランス語教育学会によるフランス語教育実情調査報告書(2012)によれば、日本の大学の第2外国語において、フランス語を選択する学生は、フランスの「文化」に対して強い興味を抱いている。しかしながら、学習者、とりわけ若者は海外渡航の経験や外国人との交流経験が少ないため、国外の文化との接点が少なく、インターネット、映画、雑誌などメディアが「文化」の表象を形成する上で強い影響を与えている。中でも、NHK は日本全国で視聴可能であり、テレビフランス語講座は約55年にわたり放映されているため、フランスの言語や文化に関心を抱いた若者が、最初に触れるフランス「文化」となる可能性がある。

テレビフランス語講座は、文法項目などの言語面はもちろん、文化に関わる番組内容の制作にも力を入れており、近年では EURO24 などの企画によって、欧州が訴える言語と文化の平等や複数言語・文化への関心の喚起、異文化理解など新たな取り組みも見られる。しかし、テレビフランス語講座に関する調査・研究に関しては、1964年8月にアンケート調査が実施されたという報告(『NHK年鑑(1965)』)と、篠田(1981)の番組制作に関する報告書のみにとどまる。

したがって、テレビフランス語講座がどのような「文化」を伝えているのかを解明することは、学習者が表象するフランス「文化」の解明の手掛かりにもなり、「文化」に関心を持った学習者への効果的な文化教育を探るうえで、意義を持つ。

以上の問題意識に基づき、本稿では、まず第1章において、言語教育における「文化」の概念と日本人学生が抱くフランスの「文化」イメージを、先行研究に依拠しながら整理する。続いて第2章において、テレビフランス語講座の歴史を概観し、第3章において『ヨーロッパ言語参照枠(以下、CEFRと略す)』(Conseil de l'Europe, 2001)の社会文化的知識項目を用いた分析手法を提示する。第4章では分析結果を示し、第5章においてはテレビフランス語講座が発信する「文化」について考察し、その意義を解明する。

1. 研究背景

第1章では、研究背景として、1節でフランス語教育における「文化」の概念を、2節で日本人学生が抱くフランスの「文化」イメージを先行研究に依拠しながら整理する。

1.1. フランス語教育における「文化」

フランス語教育において「文化」はどのように扱われているのだろうか。

Coste(1994)は、フランス語やフランス語教育は長い間、壮大で古典的で文学的な教養文化と結びついてきたと振り返り、文学が特権的な地位を確立することとなったと論じている。1950年代になり、フランスにおいて、言語はコミュニケーションを通して学習されるとの理論のもとに、書き言葉よりも話し言葉の習得を重視した **Audio-Visual Method**(視聴覚教授法)が開発され、「文化」が教養文化にとどまることなく、より広く捉えられるようになっていく。Lüdi *et al.* (1994) は、フランス語教育における「文化」の概念を外国語教授法の変遷に照らして論じている。それによれば、70年代になり、社会言語学者 Hymes(1972) が提唱したコミュニケーション能力の養成を中心目標にした **Communicative language teaching**(コミュニカティブ言語教授法)は、ヨーロッパ諸国間の交流が盛んになる中で、ヨーロッパにおいて生まれた。その中では、ある言語が話されている社会の社会的・文化的ルールに従って使用する能力、すなわち社会言語的能力(Canale&Swain, 1980)が定義され、その能力の中でも特に社会文化的能力は、コミュニケーションのために欠かせない知識であるものの、これは全世界に共通で同一の能力ではなく、それぞれの言語や社会、文化に結びついていると考えられた(Lüdi *et al.*, 1994)。

また 70年代は、フランスで移民の子どもたちの人口の増加を背景とした「異文化教育」が展開する時期でもあった。これは第二次世界大戦後にフランスが戦後復興と経済成長のため旧植民地から大量の人々を受け入れたためだった。その受け入れは1973年まで続くが、オイルショックを引き金とした経済不況により 1974年に政府は単純労働者の受け入れを停止する。それ以降、移民労働者の家族は家族呼び寄せ政策によりフランスに到来し、移民の子どもたちはフランスの学校へ通うようになった。80年代になると異文化教育は外国語としてのフランス語教育にも影響を与えるようになった。しかし、この実践においては、文化紹介などステレオタイプの強化につながり文化本質主義に陥る恐れがあった。そうした中、文化の複数性への目覚めを促し、複数の文化の中で相互関係を生み出す「異文化間教育」の考えが発展した(西山, 2015)。

カルトン(2015)は、異文化間教育の **intercultural**(異文化間性)の概念を、「異なる文化が出会い、接触するところから生まれるもので、相互のやり取りを伴う(これがまさに異文化間と形容される)付き合いやインタラクションの総体」(p.9)であり、異文化間教育とは他者の文化を学ぶことよりもむしろ、他者の表象や他者と接することを考えさせることだと指摘している。そして、異文化間教育を通して学習者は、「他者を認め、自らの心を開き、

他者の考え方に思いをめぐらせ、『自分のものの見方が唯一の見方』という思考から抜け出し、他者は異なっているとの考え方を受け入れ、その違いも正しいものと理解できる」(p.10)とまとめている。また、このような異文化の認識は、自文化の意識化を通して行われるとも指摘している。

CEFR 第 5 章もまた、「異文化に対する意識」(5.1.1.3)の重要性を訴え、「自分が育った世界」と「目標言語が話されている世界」との関係を意識するための「社会文化的知識」(5.1.1.2)の意義を強調している。この「社会文化的知識」は、他の社会集団の特性に歩み寄ることで物事の別の見方を知るため、食習慣のような目に見える要素から、価値観のように目に見えない要素まで社会的特性に関する幅広い分類の枠組みを提示している(カルトン, 2015)。このように、外国語教育における「文化」の論じられ方は、他文化についての知識の獲得に関することではなく、学習者が他文化と自文化の意識化を通じて、他者との接し方を学ぶことへと変化している。

以上のように、かつて「文化」とは教養文化を意味していたものの、コミュニケーション能力育成の言語教授法の流れを受けて、コミュニケーションのための社会的文化的ルールの獲得へと変化し、その後複雑な社会政治状況とヨーロッパにおける異文化間教育の発展により、「文化」は他者との相互理解のために他文化を意識化する枠組みへと変わりつつある。

1.2. 日本人学生が抱くフランス「文化」のイメージ

この節では、日本人学生が抱くフランス「文化」のイメージに関する先行研究を整理する。

まず、日本人大学生が抱くフランス「文化」のイメージに関する先行研究として姫田(2003)と Pungier(2007)がある。姫田(2003)は、外国語学習の文化的側面において何をどのように教えるかという繰り返される議論に対して、未習外国語としてフランス語を勉強し始めたばかりの大学生が持っているフランスへの距離感とフランス語学習に対して作るイメージを確認することで、「文化」を考察している。姫田(2003)によると、学生たちは憧れと共にフランスを眺め、敢えてそこに近づこうとはせず、日本を過小評価するなど憧れのフランスというブランドを自文化との差異化の道具としている。この距離のとり方はフランス語学習に対しても見られ、学習者は知識の受容者または傍観者のままで居続けようとしている。Pungier(2007)もまた、日本人学生のフランスへの憧れについて指摘している。これらの先行研究から、日本人フランス語学習者は、フランスやフランス文化、フランス語学習に関して憧れという肯定的なイメージを形成しつつも、自分自身とは距離を置いて積極的に接触しようとしていないことがわかる。

次に、テレビが形成するフランスのイメージに関する先行研究には、萩原(2007)と竹本(2010)がある。萩原(2007)は、メディア、特にテレビが首都圏の 13 大学の大学生に与える外国認識について調査し、日本を含む 14 ヶ国のイメージについて 14 の形容詞を設定し測

定している。その中で、フランス語学習者に限らず一般の大学生のフランスに対するイメージには、「おしゃれ」「豊かな」「文化が豊か」「先進的な」という先進的であると同時に、古い文化の伝統があると指摘している。同様の結果はイタリアにも当てはまるが、同じヨーロッパの国でもドイツとスイスに関して、文化はあまり評価されず、「安全な」「豊かな」「先進的な」という先進国としてのイメージが支配的であると指摘している。このように、一般学生の持つフランスのイメージは「文化」が豊かな国であることから出発するもので、フランスの「文化」がフランス語学習への興味や関心を引き起こしていることがわかる。

竹本(2010)は、日本のメディアが伝える「フランス」および「フランス語圏」情報を分析するため、フランス語から日本語への放送の翻訳のデータを分析し、番組制作側が選択するフランス/フランス語圏情報の傾向を解明している。外国の関連情報全体をハードニュース(政治、経済、社会、重大な事件/事故など)とソフトニュース(スポーツ、文化、話題、気象、PR[原文ママ]など)に分類すると、ソフトニュースがフランス語による情報の多くを占めている。また、フランス/フランス語圏関連情報のうち、少なくとも76%をフランス本土¹の情報に占めている。それらの結果から、テレビが構築するフランス/フランス語圏(とりわけ、フランス)のイメージは、ソフトニュースの情報に大きく依存している。とはいえ、フランス/フランス語圏関連の番組のテレビ視聴に関して、学生は「興味はあるが実際に見るには至っていない」と述べている。さらに、「自分が普段イメージしているフランスと、テレビで見るフランス情報は同じか」という質問に対しては、全体の9割近く学生が「同じ」「だいたい同じ」と回答している。このことから、日本人学生には、漠然としたフランスのイメージが定着しており、彼らはそれ以上の情報を求めようと積極的に働きかけを行っていないことがわかる。さらに竹本(2010)は、大学生にとって大きな情報源の1つであるインターネットについて、「インターネットは有効な情報ツールではあるが、まず、ユーザー自身に具体的な『関心事』があり、その情報を検索し、選出していくという限定的な使い方に終始する。つまり、『もっとフランス/フランス語圏のことについて知りたい』という漠然とした興味には向いていない。」(pp.142-143)と指摘し、既存のイメージだけにとらわれない放送内容の選定と、外国語教育におけるテレビメディアの活用方法を考える必要性を訴えている。

また、石丸(2009)はフランス語学習の進行とフランスのイメージの関係について考察している。石丸(2009)は、雑誌、テレビ、教科書、子供向けの絵本、広告などによるステレオタイプが我々の生活の至るところに存在し、切り離せないものであると確認し、日本とフランスにおける相互ステレオタイプの考察をしている。フランス語専攻138名と非専攻44名の日本人学生に対して「フランス」と聞いて連想する語に関するアンケート調査を行ったところ、その結果は、「パリ」を始め、「エッフェル塔」や「ルーブル美術館」、「凱旋門」など典型的な有名観光地を回答するものが最も多い。また、「パリコレ」や「ブランド」、「ファッ

¹ 海外領土は含まない。

ション」、「香水」等もまた非常に多い。また「サッカー」やその選手に関する回答、また「美」に関する回答も多く、「おしゃれ」、「美しい」、「きれい」など肯定的価値が表れている回答も取り上げている。また、学生の中でフランス語学習の増加と共に否定的な回答が増加することも指摘しており、否定的な回答としては、「エゴイスト」や「プライドが高い」、「フランス語しか喋らない」などの回答を挙げている。そして、フランス語学習が進むにつれて、肯定的な観光地のフランスのイメージにとどまることなく、肯定的な部分と否定的な部分の両方のイメージを具体的に挙げるよう変化していると指摘している。

これらの先行研究から、日本人学習者にとってフランス文化は、「憧れ」であり、「観光名所を中心とした」、「『文化』が豊かな国」というイメージが定着していることがわかる。しかしながら、これらの「文化」イメージだけでは、現在の学習者が高い興味を示す「文化」の解明には十分ではない。そこで、テレビメディアがどのような「文化」を発信しているかをも解明し、フランス「文化」の解明を深める必要がある。

本稿では、学習者の「文化」イメージに影響を与える情報源としてのテレビの中でも、特にフランス語学習と関係が深いNHKのテレビフランス語講座が発信する「文化」を分析する。なぜなら、テレビ講座はフランス語やフランス文化に興味を持った学習者が、それらの情報を得るために接触する最初の間である可能性が高く、そこで伝えられる情報は、フランス語学習の過程で学習者の「文化」イメージの形成に大きく関わるためである。しかしながら、テレビフランス語講座が伝える「文化」に関する先行研究はない。

したがって、本稿では、テレビフランス語講座がどのような「文化」を伝えているのかを分析することにより、学習者が表象するフランスの「文化」を探りたい。

2. NHK テレビフランス語講座

第2章では、NHKのテレビフランス語講座の発信する「文化」を解明するにあたり、1節では教育テレビの歴史を、2節でNHK語学講座の歴史を、そして3節でテレビフランス語講座の歴史について概観し、テレビフランス語講座の歴史をふりかえるとともに、テレビフランス語講座での「文化」の扱われ方の変遷を論じる。

2.1. 教育テレビの歴史

日本におけるテレビ放送は、1953（昭和28）年2月1日午後2時にNHK東京テレビジョン局の開局とともに始まった。商業テレビ（民放）は、同年8月28日には日本テレビ放送網（NTV）が開局され、現在では全国放送局、地域放送局と数多くの放送局がある。

日本の教育テレビの歴史について、古田（2009）は、「教育専門局の誕生」の経緯と「公共放送の教育専門局」、「商業放送の教育専門局」を考察し、教育専門局の誕生を公共放送と商業放送の両方向から検証し、現在まで続くNHK教育テレビについて考察している。

古田（2009）によると、教育専門局は、郵政省が1957年に策定したテレビ放送サービスの全国拡大と教育・教養番組の重視を特徴とする「第1次チャンネルプラン」によって実現した。古田（2009）は、この背景として3点を挙げている。第1点は「公共放送のNHKと新聞社を中心とする民間企業のテレビ放送事業に対する旺盛な意欲」（p.177）であり、第2点は「低俗番組批判で増幅された放送番組の質の向上と放送の教育的機能の重視を求める議論の高まり」（p.177）を原因とし、1957年の流行語である「一億総白痴化」によってその批判がさらに高まることとなったことであり、第3点は、「放送サービスの量的拡大を図る一方で多様化を求めた放送行政」（pp.177-178）であると分析している。これらを背景として、1959年1月に、日本で初めての教育専門局としてNHK教育テレビジョン局が開設され、商業放送においても1959年2月に日本教育テレビ（NET、現在のテレビ朝日）、1964年4月に東京12チャンネル（現在のテレビ東京）が教育専門局として開局し、郵政省は教育専門局に一般の総合番組局より高い教育50%・教養30%の番組編成比率を義務付けた。そして、公共放送のNHK教育テレビ局は教育放送の収益性の低さを補う財源などを整え、現在も教育専門局として存続しつつある一方で、商業放送の2局は教育放送による損失が経営を圧迫し、1973年11月に総合番組局に移行することとなった。その結果、教育専門局が公共放送と商業放送の両方に展開する状態はわずか15年弱で終わりをづけ、現在、教育専門局はNHKと1985年4月から放送による授業を開始した放送大学の2局になった（古田，2009）。

2.2. NHK 語学講座の歴史

NHK テレビの語学番組で最も早くから開始された番組は、「学校教育」の枠組みで放送された「英語教室」であり、テレビ放送開始の翌年の1954年にさかのぼる。この番組は教育テレビ局の開局する以前に放送されたため、教育専門の局ではなく一般のNHK放送局

の枠組みで放送された。「学校教育」という枠組みを超えてNHK教育テレビジョン局で一般に開かれていた語学講座としては、フランス語講座とドイツ語講座が最も早く、それは教育専門局であるNHK教育テレビジョン局が開局した1959年であった。現在、NHKでテレビの語学講座は英語をはじめ、フランス語、ドイツ語(1959年～)、中国語(1967年～)、スペイン語(1967年～)、ロシア語(1973年～)、韓国語(1984年～)、イタリア語(1990年～)、アラビア語(2004年～)の語学講座が放送されている²。

2.3. NHK テレビフランス語講座の歴史

テレビフランス語講座は、NHK教育テレビジョン局で放送された語学講座として最も開始年度が早い。これは、1959年10月6日に東京大学教授朝倉季雄を講師として開始され、番組名を変更しながらも現在まで約55年間にわたり放送されている。放送開始から現在までの番組の担当講師や放送時間などの詳細は、付録1の表にまとめた。

本節では、テレビのフランス語講座における「文化」の取り上げ方の変遷を、『NHK年鑑』に基づき、番組名が変更された時期ごとに検証する。『NHK年鑑』はNHKと国内外の放送界の1年間の動きを報告する書籍である。1959年10月から1963年3月までの「フランス語初級講座(副題:たのしいフランス語)」を第1段階、1963年4月から1976年3月までの「たのしいフランス語」を第2段階、1976年4月から1990年3月までの「フランス語講座」を第3段階、1990年4月から2008年3月までの「フランス語会話」を第4段階、2008年4月から2016年9月までの「テレビでフランス語」を第5段階、2016年10月からの「旅するフランス語」を第6段階と分類する。

第1段階である1959年10月から1963年3月までの「フランス語初級講座(たのしいフランス語)」は、講師役の大学教授がフランス人ゲストと共に、「視聴覚資料を生かして、テレビならではの生きた語学教育」(『NHK年鑑(1961)』, p.205)を実施しようとしていた。この時期に文化に関する言及は見られない。

第2段階である1963年4月から1976年3月までの「たのしいフランス語」は、はじめてフランス語を学ぶ学生や一般成人を対象とするもので、基礎的文法や会話表現から構成されている。文化に関しては、1971年からフランス放送協会(Office de Radiodiffusion Télévision Française【ORTF】)制作の映像を用いて、フランスの風俗や習慣に密着した教材を中心に土曜日の番組を構成していた。ORTF提供の映像は1965年から1970年の間も用いられていたという記述があるが、その内容が文化に関してのものだったのかは明記されていない。

第3段階である1976年4月から1990年3月までの「フランス語講座」では、編成が多彩になり、この年の10月5日分の放送からカラー放送となった。はじめてフランス語にふ

² ポルトガル語講座も放送されているが、テレビ講座ではなくラジオ講座のみで放送された。

れる視聴者を対象とするもので、やさしい会話を主な教材として 1 年間で簡単な文章が書け、やさしい会話ができることを狙いとしている。フランス語の発音を学ぶコーナーや、夏休みにはフランス旅行に役立つ小シリーズも放送された。1984 年の 4 月から、前期は文法を中心とした基礎的な事項の学習を、後期はその基礎をベースに会話を中心とした実践的な学習の編成となっている。1984 年と 1985 年の夏休みには、福岡と広島スタジオに学習者を集めて視聴者参加のレッスンを試みている。1986 年と 1987 年は、前期に会話を中心とする実践学習を、後期に文法中心の基礎学習に分けて放送している。1988 年と 1989 年は、水曜を表現編、土曜を文法編と曜日によって項目を変えて放送している。文化に関しては、月 1 回の「フランス文化シリーズ」というコーナーを設けている。1987 年からは中上級者向けに、各界で活躍するフランス人へのインタビューを放送し、フランス人の考え方や生活を紹介している。

第 4 段階の 1990 年 4 月から 2008 年 3 月までの「フランス語会話」は、日常生活に使われる表現の学習に重点を置いている。教材として、フランス外務省制作の教材「ようこそフランスへ」(1991 年)や、ドラマ(1993 年)、スイス・ヴィクトール社制作のフランス語教育ソフト³(1994)、フランス現地で撮影したドラマ(1995)、旅を通して学ぶ実践シリーズとして現地での撮影にもとづく会話シーン(1997)などが用いられている。そして、文化に関しては、年に 4 回から 10 回程度の「フランス文化シリーズ」を放送している。このシリーズでのフランス「文化」について、『NHK 年鑑』は詳細な報告を行っていないが、1995 年にはフランス国営放送の「作家シリーズ」を、1996 年にはインタビューを素材としていたと報告している。

1998 年からは英語以外の語学番組で、「スタンダード 40」という新しい方法論が開発され、「これだけ覚えれば大丈夫!」をキャッチフレーズに、基本文例 40 を核として導入し、番組が刷新された。それに伴い「フランス語会話」も、番組の前半は「スタンダード 40」に基づいた基本表現の学習にあてられ、後半は「文化」の学習として芸術・文化・風土への理解を深める編成になった。また、2001 年には「新スタンダード 40」を導入し、旅行会話を学ぶプログラム編成となった。それ以降、基本表現と文化項目のどちらも取り上げる番組構成となった。文化項目として取り上げられているのは、映画や音楽、ドラマ、著名人のインタビューであり、2005 年には南仏で撮影した中級者向けスキットから南仏の文化も取り上げている。さらに、2006 年には英語以外の語学番組がリニューアルし、前期の入門編と後期の応用・文化編として再構成し、入門編は半年間の講座となり、年に 2 回学習を始められる機会ができた。また内容も中級またはそれ以上の学習者までと幅広い視聴者に向けた番組づくりが目指され、スキットや文化情報を充実させるよう多様な編成がなされた。

これまでとは異なる演出として、2000 年から 2003 年にかけては生徒役が配置され、モデルやタレントが起用されるようになった。タレントの起用は、2004 年から 2006 年を除いて、現在まで続いている。

³ どのような番組ソフトが用いられていたのかは不明である

第5段階としては2008年4月から2016年9月までの「テレビでフランス語」があげられる。英語以外の語学番組（ドイツ語、フランス語、中国語、スペイン語、イタリア語、ハングル、アラビア語の7言語）が「テレビで〇〇語(講座)」へと一斉に番組名が変更され、内容もブラッシュアップされ、語学の学習だけではなく、文化情報をも充実させる放送内容となった。2008年は北フランスの伝統文化と共に日常会話を学習する構成となっており、2009年は人生と言葉をテーマに、パリの人々へのインタビューや、フランスの流行事情をも扱っている。

そして2010年から2015年にかけて、欧州4言語(ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語)の共通企画「EURO24」が開始された。これまで各言語個別にカリキュラムを進めていたことと異なり、毎回共通のフレーズを取り上げ、各言語の特徴や、文化的背景を比較することにより他言語にも興味を抱かせる演出が試みられた。

第6段階として2016年後期から現在に至るまで「旅するフランス語」が放送されている。放送は開始されたばかりで、まだ『NHK年鑑』の紹介はないことから、NHKの番組案内のwebページをもとに番組の概要を伝えることとする。番組は講師が番組を進行するのではなく、女優とネイティブの案内役がフランスを訪れることから構成されており、魅力あふれるフランス文化を探る「オトナの女性旅」をテーマとし、「旅で役立つフランス語」を学習しながら、フランス文化を学ぶ編成になっている。文化に関しては、「フランス・パリ。そこには、ファッション・グルメ・インテリアなど洗練された一流の文化が常に渦巻いています。」と提示され、その奥深さを知る番組であると紹介されている。

このようにテレビフランス語講座それぞれの番組を通時的に概観すると、第4段階の1990年4月から「フランス語会話」、特に1998年以降に、文化情報が毎回の放送で取り上げられる編成となってきたことがわかる。

3. 研究手法

第3章では、1節で本研究の研究対象を確認し、2節ではその分析手法を説明する。

3.1. 研究対象

テレビフランス語講座には長い歴史があるが、「文化」の比重が増したのは1998年以降である。その中でも、本稿は、2010年度から2015年度の「テレビでフランス語」の前期(4月～9月)放送回で扱われた「文化」を研究対象とする。これは、欧州4言語(ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語)のテレビ講座の共通企画「EURO24」にあたる。この6年間の番組を選択した理由は、複数年の内容を調査できる最新のシリーズであること、また、最新の番組を取り扱うことにより、現在の学習者が抱く「文化」概念を検証できるためである。

また、研究対象のデータとしては前期放送回のみを扱う。なぜなら、この番組は半年構成で、後期(10月～3月)は前年度の再放送であるためである。放送時間は25分間で、各年全24回から構成されている。ただし、2010年の第5回、15回目、2011年の第12回目の放送回は入手ができなかったため除くこととする。また、各回の番組の冒頭にオープニング曲が流れるもののこれを含めず、曲の終了後以降を分析の対象とする。

各年の番組テーマと構成を以下に提示する。

【表1：番組テーマと構成(2010年-2015年)】

年	テーマ	番組構成・内容
2010	・共通テーマ「ヨーロッパ短期滞在でプチリセット！」 ・フランス語のテーマ「愛から学ぶフランス語」	①スキット：短期滞在中でプチリセット！～パリ編～ ②初級編「愛の劇場」：基本表現と発音 ③中級編「愛のことば 芸術家ゆかりの地を訪ねて」
2011	・共通テーマ「ヨーロッパ流 ぐらしカル 見つカル」 ・フランス語テーマ「ブルジュ フランスの真ん中へようこそ」	①スキット：ブルジュにホームステイ ②発音練習 ③文化コーナー
2012	・共通テーマ「その先のヨーロッパへ」 ・フランス語テーマ「24の街歩きフレーズでフランスを体感～パリ、マルセイユ、トゥールーズ～」	①スキット②文化コーナー

2013	<ul style="list-style-type: none"> ・共通テーマ：「感覚で学ぶヨーロッパ」 ・フランス語テーマ「五感+αでリオンを体感」 	<ul style="list-style-type: none"> ①スキット：舞台はリオン ②発音練習(シャンソン) ③文化コーナー
2014	<ul style="list-style-type: none"> ・共通テーマ「“行動するためのことば”を手に入れよう」 ・フランス語テーマ「パリジェンヌに学ぶ！シーン別会話」 	<ul style="list-style-type: none"> ①スキット：舞台はパリ。シーン別にフランス語会話表現を学ぶ。 ②日本発見：フレンチブルドッグが日本の文物や習慣を紹介 ③発音練習(クロスワード)
2015	<ul style="list-style-type: none"> ・共通テーマ「“何がしたいか”を意識しながら学ぶ 24 回」 ・フランス語テーマ「続・パリジャンに学ぶ！シーン別会話」 	<ul style="list-style-type: none"> ①スキット：舞台はパリ。シーン別に実践的スキルを磨く。 ②動詞の活用：ダンスユニット「Les Twins」が、動詞活用などを紹介。 ③日本発見：フレンチブルドッグの日本探検をフランスの女の子と共に楽しむミニドラマ

(NHK テレビテキスト『テレビでフランス語』2010 年から 2015 年の 4 月号を元に作成)

ここでは「文化」を分析するにあたり、文法、発音、単語といった言語の解説以外を対象言語の「文化」として扱う。ただし、ことわざは文化的な価値観を反映していることが多い(ショールズ,2013[2007])ために含める。

3.2. 分析方法

2010 年から 2015 年の「テレビでフランス語」を、マス・コミュニケーションの内容分析の手法を用いて分析し、そこで取り上げられている「文化」を解明し、その提示方法を示す。

3.2.1. 「文化」の分類指標としての CEFR の社会文化的知識

本論文では「文化」を分析するにあたり、「文化」を分類するための指標として CEFR(5.1.1.2)の提示する「社会文化的知識」を使用する。なぜなら、この分類指標は高級文化か日常の生活習慣の方のみに偏ったものではなく、また見える文化と見えない文化の両方を含む指標であるためである。さらに、CEFR の社会文化的知識は、定義や比較が難し

()
.....
(6) セット：1. VTR、2. スタジオ
(7) 提示方法： 1. 提示、 2. 交流
(8) 発言者：1. 講師、 2. ネイティブ ()、3. ナビゲーター、4. その他 ()
(9) 備考：()

注1：5の項目は、区分で「2. 対象言語の文化」に分類された場合のみ記入

注2：5-3の参考資料は、CEFRの5.1.1.2の社会文化的知識の表である(付属資料2)

コーディングシートの記入については、まず放送内容の分類(1.言語、2.対象言語の文化、3.個人の文化、4.隣国の文化、5.日本文化、6.フランス基本情報)を決定し、次にその項目にどれくらいの時間を費やしているのかを記録し、その項目の内容の詳細を記述する。「1.言語」は、言語の解説(文法、発音、単語)がなされているもの、「2.対象言語の文化」は、フランス語を話す集団の文化、「3.個人の文化」は、集団の文化ではなくフランス語話者個人の意見や価値観、その人の置かれている状況に関する記述を指す。「4.隣国の文化」には、スペイン語、ドイツ語、イタリア語に関する記述を分類する。これは、NHKの語学講座が2010年からEURO24という欧州4言語(ドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語)を共通テーマとして設定し、4言語の特徴を比較できる構成となり(『NHK年鑑(2011)』)、「テレビでフランス語(2010年～2015年)」においても欧州言語4か国を比較するコーナーが設けられているためである。そこで、他の3ヶ国に関する事項はここへ分類できるようにした。「5.日本文化」には、日本に関する内容が提示されている場合を、「6.フランス基本情報」は、フランス全体または各都市の人口や面積などのフランス国内に関する基本情報を分類する。

放送内容が「2. 対象言語の文化」に該当した場合、地域(1. パリ、 2. 国内、3. フランス語圏、4. 記述無し[フランス全体のこととして提示])を特定し、さらにCEFRの社会文化的知識の指標に照らし合わせ、どの項目に当てはまるのかを決定する。CEFRには「4-4.地域文化」の項目があるが、これは本研究ではフランス以外のフランス語圏に限定する。なぜなら、年次によって、番組はあるひとつのフランス国内の地域に絞って構成されており(例えば、2013年はリヨンが舞台となっている)、フランスの地域特有の文化を4-4に分類するとその中で詳細な文化項目の分類ができなくなるためである。また、フランス国内の地域文化と、フランス以外のフランス語圏の地域文化を明確に区分するためでもある。したがって、本研究はフランス以外のフランス語圏をすべて「4-4. 地域文化」に分類し、フランス国内の地域文化に関しては地域名を記入し、社会文化的知識の1から7の項目に分類

する。

さらに、文化の提示方法を調査するため、「提示方法」が、一方的に登場人物によって提示されている場合（1. 提示）と、複数人の出演者のやり取りを通して情報が伝えられている場合（2. 交流）を区別する。そして発言者が、講師、ネイティブ、学習者の役割を担う日本人タレントのナビゲーター、その他ナレーターや字幕のみなど分類する。ここでの「ネイティブ」とは対象言語となるフランス語の母語話者である。このことを踏まえ、提示方法の分類例を示す。例えば、例1のような場合であれば、提示方法は「交流」、発言者は「講師」「ネイティブ」「ナビゲーター」の3名と判断する。

(例1)

ネイティブ：《 faire un canard 》 : tromper un morceau de sucre dans le café ou dans une boisson alcoolisée. (字幕「faire un canard コーヒーや強いアルコール飲料に砂糖を浸すこと」 コーヒーに砂糖浸している映像と共に映る。)

ナビゲーター：ええっ！

(ナビゲーターが実際に角砂糖をコーヒーに浸して食べる)

ナビゲーター：甘っ！

ネイティブ・講師：(笑う)

講師：フランス人はこういう甘いもの好きですよ。でまあ、そうやって中にはですね、角砂糖をコーヒーに浸して食べる人もいますよ。

ナビゲーター：へえ。

講師：うん、でまあこのそう、砂糖を浸す様子がですね、カモが首を見ずに突っ込むそういうのに似ているからこう言う表現でたんだと言われていていますよね。

(2013年 第9課の「五感+α café」の抜粋)

次の例2であれば、提示方法は「提示」となり、発言者は「ナレーター」のためにその他と判断する。

(例2)

ナレーター：Vélib'とはパリ市が提供するレンタル自転車のこと。市内におよそ300mの間隔でスタンドが置かれています。24時間誰でも使えてとっても便利。観光客にも人気です。

(映像切り替え)

現地案内人：(今日のキーフレーズを発音し説明する) J'adore le Vélib'. D'ailleurs, j'adore..., C'est une expression très pratique... (字幕「J'adore...は便利な

表現」。J'adore le Vélib' というフレーズの表示と共に。)

(2014年 第8課のVTRの抜粋)

これはナレーターがレンタル自転車 (Vélib') について説明した後、学習するフレーズを紹介しているため、ここで話題が変化していることがわかる。したがって、「ナレーター」が Vélib' については「提示」の方法で伝えていると判断する。

以上のようなコーディング作業によって分類された内容をデータ化し、量的な視点からの調査結果を示すとともに、「文化」に関する放送内容を調査することにより、取り上げられている「文化」とは何か、またそれらはどのように提示されているのかを考察する。

4. 結果

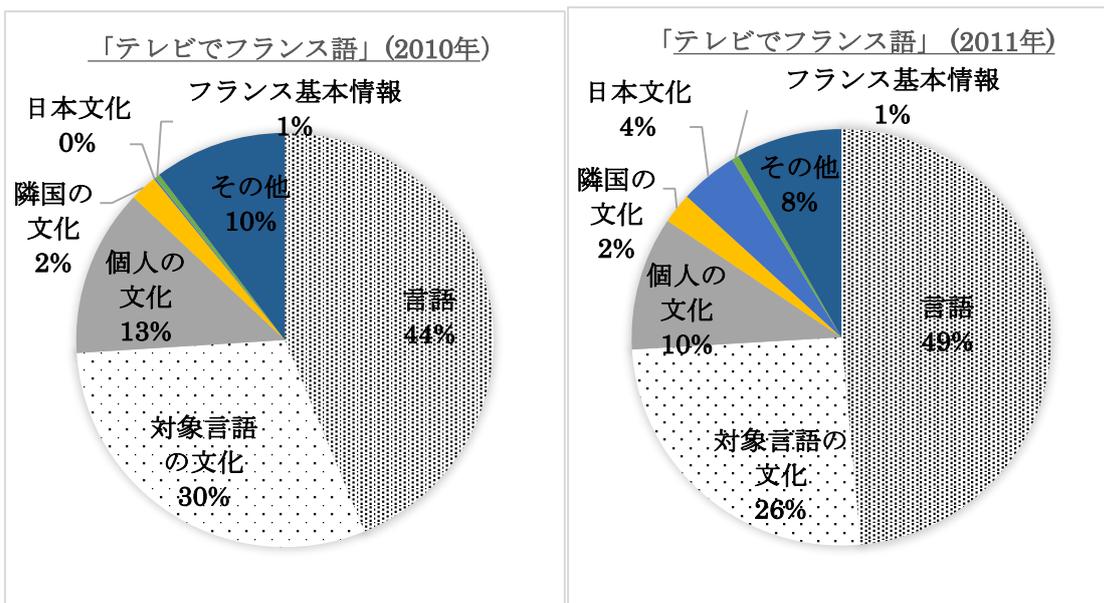
本章では、3章の研究手法に基づき、2010年度から2015年度の「テレビでフランス語」の放送を分類した結果を示す。

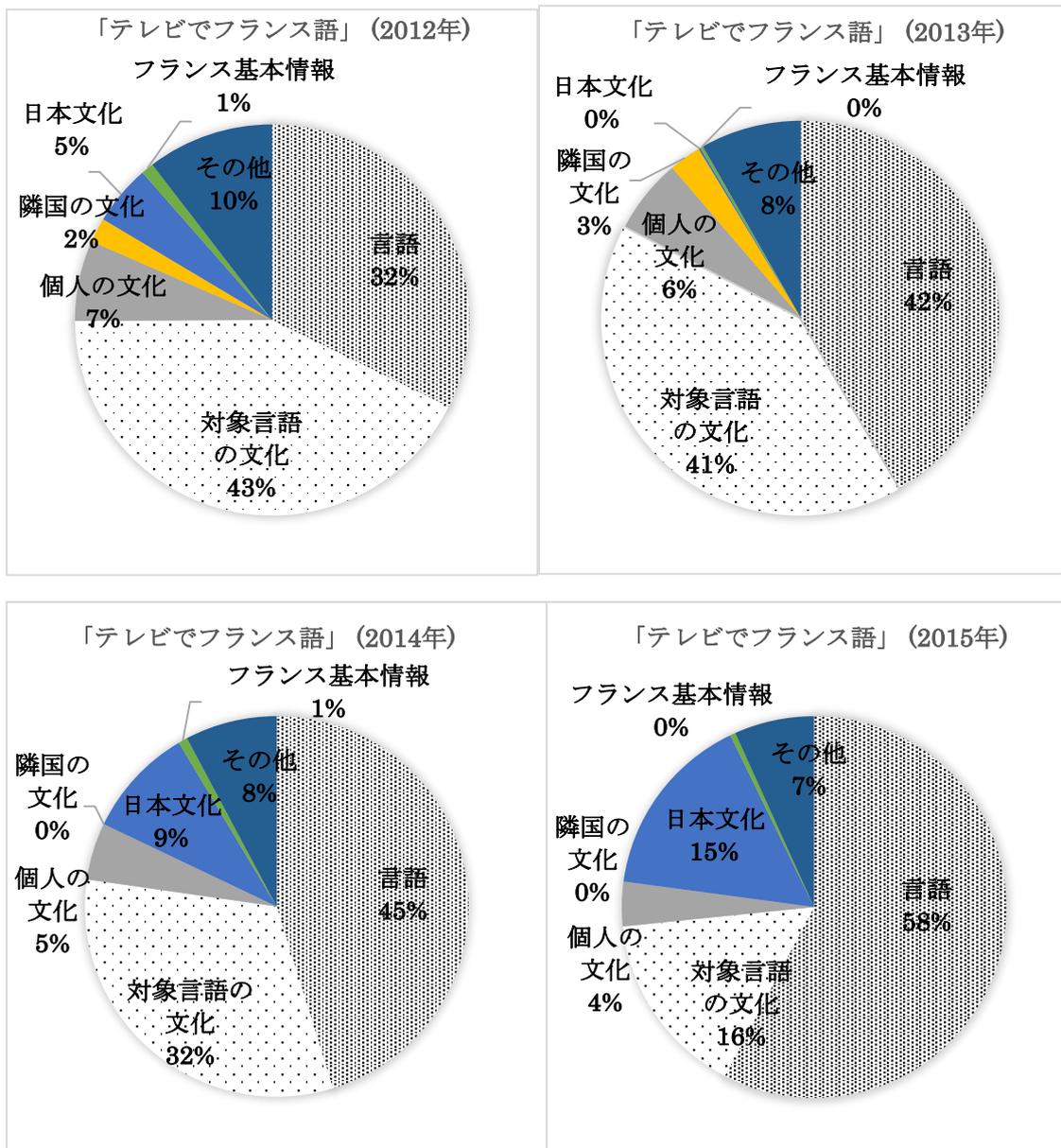
4.1. 番組で取り上げられている「文化」

ここでは、番組内で取り上げられている「文化」に関する分析結果を提示する。まずは、「文化」が番組全体に占める割合を示し、次に対象言語の「文化」として具体的に何が取り上げられているのかを詳述する。

4.1.1. 「文化」が放送内容に占める割合

まず、ここでは放送内容に占める「文化」の割合を示す。図1は、2010年から2015年の各年の「テレビでフランス語」の放送内容である。各項目の内容は、3.2.2. 内容分析の手法のコーディングシートの記入方法を述べた際に示した通りである。また、「その他」は、番組の中で次のコーナーへの切り替えやつなぎの時間を示す。





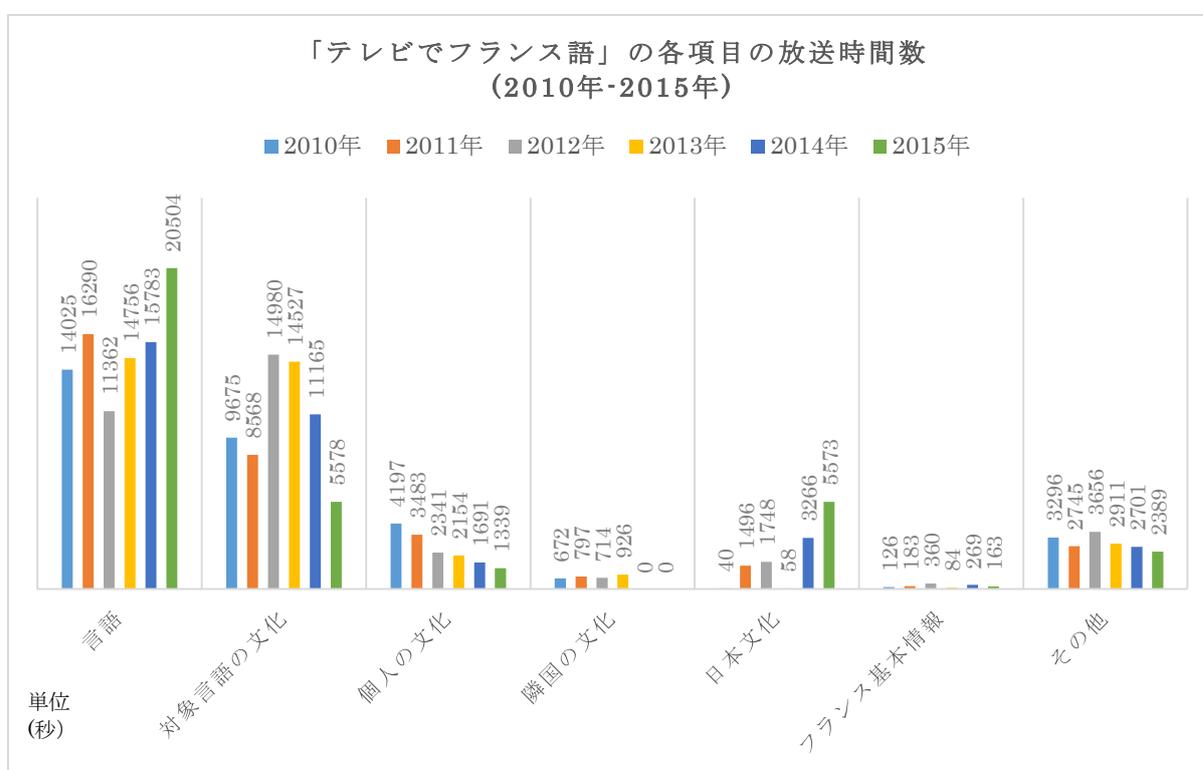
【図1：「テレビでフランス語」放送内容（2010年-2015年）】

グラフから、最も割合の多い項目は「言語」で、次に多い項目が「対象言語の文化」であり、この2つの項目で毎年の放送内容の全体の約4分の3を占めている。「言語」と「対象言語の文化」の比率としては、2010年は4:3、2011年は5:3、2012年は3:4、2013年は1:1、2014年は5:3、2015年は3:1である。このことから、テレビフランス語講座は言語のみならず文化に関する番組制作にも力を入れていることがわかる。

「対象言語の文化」に注目すると、この項目に最も多くの時間をとっているのが2012年で、全体の43%を「文化」の放送にあてている。2012年度は、研究対象の中で番組の舞台としてパリ、トゥールーズ、マルセイユの3都市を扱い、それぞれの都市の文化的特色を取

り上げたため、「対象言語の文化」の項目の割合が増えたと考えられる。「対象言語の文化」の割合が一番少ない年は2015年で16%となっている。これは、2015年度は日本文化を取り扱うコーナーや、CEFRの言語学習の方向性を重視し「できる」ことを増やし、学んだ言語表現をナビゲーターが使用し、講師やネイティブのフィードバックによって実践を通して学習する形式に多くの時間があてられているためと考えられる。

次に、「言語」「対象言語の文化」以外の項目に関しては、取り上げられる割合がこの2つと比べて少なく図1ではわかりづらいため、図2の各項目が扱われている時間数を用いて説明する。



【図2：「テレビでフランス語」の各項目の放送時間数 (2010年-2015年)】

「個人の文化」とは、ネイティブ出演者の主張や個人の趣味嗜好、アーティストや映画監督、俳優のインタビューなどを放送している項目である。この項目を取り上げる時間は年々減少傾向にあるものの毎年扱われ、対象言語内の集団として「文化」を提示する場合以外にも、対象言語の個人の「文化」が提示されていることがわかる。減少傾向にある理由としては、2013年以降、言語学習に配分される時間が長くなっていることが考えられ、スタジオにいるネイティブが自分自身のことについて語るよりは、ナビゲーターの言語学習のアシスタントの役目を果たすようになったためと考えられる。

図2を見ると、ドイツ、スペイン、イタリアなど「隣国の文化」は、2014年、2015年に

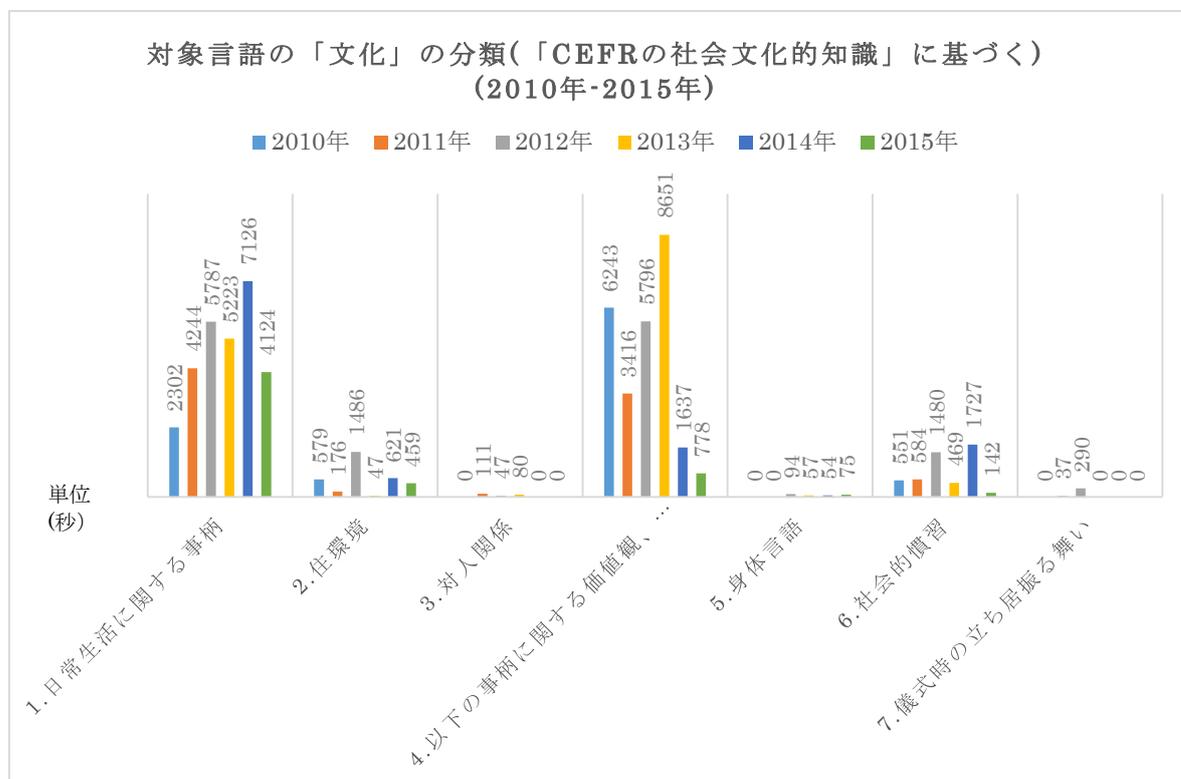
は全く扱われていないことがわかる。2013年までは欧州4ヶ国の共通企画として、毎回共通のテーマに沿って4ヶ国を比較するコーナーが設定されていたが、2014年以降は廃止されている。その代わりに、2014年、2015年は、日本文化をフランス語で紹介するコーナーが新設されており、日本文化の提示にあてる時間が伸びている。

「フランスの基本情報」は、その年のテーマや舞台となる地域を紹介する内容であり、毎回の第1回目の放送で、番組の導入として扱われることが多いため、所要時間数は少ない。

図1と図2によれば、毎年の番組の特徴に合わせ各項目への時間配分は変動するものの、「対象言語の文化」にかかる放送時間は「言語」に占める割合に続いて長く、番組のなかで「文化」を伝えることが重視されていることがわかる。そこで次の節では、この「対象言語の文化」についての具体的な放送内容を分析する。

4.1.2. 対象言語の「文化」

ここでは、特に対象言語の「文化」としてどの事項が取り上げられているのかを検討する。CEFRの7つの分類、すなわち1.日常生活に関する事柄、2.住環境、3.対人関係、4.以下の事柄に関する価値観、信条、態度、5.身体言語、6.社会的慣習、7.儀式時の立ち居振る舞いに基づく分類結果を図3に示す。



【図3: 対象言語の文化の分類(「CEFRの社会文化的知識」に基づく)(2010年-2015年)】

このグラフを見ると、「1.日常生活に関する事柄」と「4.以下の事柄に関する価値観、信条、態度」に多くの時間があてられており、次に「6.社会的習慣」、「2.住環境」と続くが、「3.対人関係」、「5.身体言語」、「7.儀式時の立ち居振る舞い」に関してはほとんど放送されていないことがわかる。各項目の詳細を分析していく。

a) 「1.日常生活に関する事柄」

まず、「1.日常生活に関する事柄」に関する放送内容は毎年多く扱われており、2010年から2015年に放送された対象言語の「文化」の中で最も多くの時間があてられている。

「1.日常生活に関する事柄」について、CEFRは次の3項目の例を挙げている。

- 1-1 食べ物や飲み物、食事の時間、食卓での作法
- 1-2 公的祝日・勤務時間と仕事のやり方
- 1-3 余暇の活動（趣味、スポーツ、読書習慣、メディア）

本稿では、これ以外でフランスでの生活を取り上げている場合は、「1-4. その他」に分類する。そこで、このような分類指標に基づく結果が表3である。

【表3：「1.日常生活に関する事柄」の詳細】

年	1-1 食べ物や飲み物、食事の時間、食卓での作法	1-2 公的祝日・勤務時間と仕事のやり方	1-3 余暇の活動（趣味、スポーツ、読書習慣、メディア）	1-4 その他	合計
2010	694	0	964	644	2302
2011	1990	50	734	1470	4244
2012	1883	108	1315	2448	5754
2013	3378	0	623	1222	5223
2014	4383	39	1346	1358	7126
2015	1751	0	722	1651	4124
合計（秒）	14079	197	5704	8793	28773

表3を見ると、「1-1 食べ物や飲み物、食事の時間、食卓での作法」に関する項目が一番多く取り上げられていることがわかる。それは、どの年のテーマにも「食」の存在が欠かせないためだと考えられる。2010年度のテーマは「短期滞在」、2011年度は「ホームステイ」、2012年度は「街歩き」、2013年度は「五感+αで学ぶ」、2014年度と2015年度は「シーン別会話」であり、毎年「食」や「味覚」への言及が必ず含まれている。

また、「食」は学習者がフランス語圏を訪れた際は必ずといっていいほど接触する項目であり、学習者の接触頻度が高く身近であるうえに、自文化との比較や認識がしやすい項目であるために多く取り上げられていると考えられる。

次に多い項目は「1-4 その他」で、買い物の仕方や移動・交通手段に関する内容が多い。買い物の仕方や移動・交通手段に関する内容は、学習者がフランス語圏を訪れる際には知っておくべき「文化」情報であり、それらの項目への対応の仕方を知るとは、フランス語圏を訪れる際に抱く不安の軽減に繋がるため、扱われていると判断できる。

そして、「1-3 余暇の活動（趣味、スポーツ、読書習慣、メディア）」として、フランス人の娯楽について取り上げ、彼らの暮らしを伝えている。観光地としてのフランスではなく、生活の場所としてのフランスにスポットがあてられている。

「1. 日常生活に関する事柄」の詳細に関しては付録3に記載している。

b) 「2.住環境」

「2.住環境」については、アパルトマンや家賃などの説明や地区ごとの生活環境の特徴など、フランスで生活するにあたっての情報が提供されている。例えば、フランスの家の素材は石であり日本と異なるということや、アパルトマンは *chambre de bonne* (屋根裏部屋)なら安くで借りることができるということ、また地区の特徴としては移民の街として知られるパリ 20 区ベルヴィルの様子などが取り上げられている。

c) 「3.対人関係」

「3.対人関係」は、2011年、2012年、2013年のみの放送であり、2011年はテーマがホームステイであり家族に関する事柄への言及もあったので放送時間が他の年に比べ少し長い。しかしながら、全体的な傾向として、「3 対人関係」に関しては明示的にほとんど取り上げられていない。その理由としては、番組内容が初級フランス語学習者を対象としているためだと考えられる。そのため、テレビフランス語講座の各回で学ぶ言語フレーズとしては自分の要望などを伝えるためのものが多く、スキットの中での人との交流がお店の人などに限定されている。したがって、職場などで人間関係を構築する段階までのスキルを提示していないため、「3.対人関係」に関する放送内容がほとんどないと考えられる。

d) 「4.以下の事柄に関する価値観、信条、態度」

「4.以下の事柄に関する価値観、信条、態度」は、「1.日常生活に関する事柄」の次に多く放送されている「文化」である。

「4. 以下の事柄に関する価値観、信条、態度」について、CEFR は、例として次の事柄に関する価値観、信条、態度を挙げている。

- 4-1 社会階級
- 4-2 職業的な集団（学者、経営者、公務員、技術者、労働者）
- 4-3 財産（収入および相続）
- 4-4 地域文化
- 4-5 治安
- 4-6 制度
- 4-7 伝統と社会変革
- 4-8 歴史、特に、歴史上重要な人物や出来事
- 4-9 少数集団（民族的、宗教的）
- 4-10 国民意識
- 4-11 外国、外国人
- 4-12 政治
- 4-13 芸術（音楽、造形芸術、文学、演劇、ポピュラー音楽や歌）
- 4-14 宗教
- 4-15 ユーモア

本稿での「4-4 地域文化」は、フランス以外のフランス語圏に限定する(3.2.2.内容分析の手法を参照)。また、新たに 16 番目の項目として「ことば（ことわざなど）」を例として導入した。なぜなら、ことわざは、文化的な価値観が反映されていることが多いので（ショールズ, 2013[2007]）、文法や発音などの言語項目の解説と区別すべきと考えたからである。さらに 17 番目の項目として「4-17 その他」を加える。

このような分類指標のもとに分類された結果が表 4 である。ただし、「4-1 社会階級」、「4-3 財産（収入および相続）」、「4-9 少数集団（民族的、宗教的）」、「4-10 国民意識」、「4-11 外国、外国人」、「4-12 政治」に該当する放送はなかった。その理由としては、これらの項目は、報道などのハードニュースと関連する内容として取り上げられる可能性が高く、1 章 2 節のフランス「文化」イメージに関する先行研究でもあったように、日本のテレビが取り扱うフランス/フランス語圏の情報はソフトニュースが選択されている(竹本, 2010)ためだと考えられる。このことから、テレビフランス語講座の扱う「文化」に関しても、ソフトニュースの発信が多く、「4-1 社会階級」、「4-3 財産（収入および相続）」、「4-9 少数集団（民族的、宗教的）」、「4-10 国民意識」、「4-11 外国、外国人」、「4-12 政治」は取り上げられていないといえる。

したがって、「4-1 社会階級」、「4-3 財産（収入および相続）」、「4-9 少数集団（民族的、宗教的）」、「4-10 国民意識」、「4-11 外国、外国人」、「4-12 政治」に該当する放送はないことから、表 4 にはそれらの項目を除いた結果を示す。

【表 4：「4. 以下の事柄に関する価値観、信条、態度」の詳細】

	4-2 職 業 的 な 集 団	4-4 地 域 文 化	4-5 治 安	4-6 制 度	4-7 伝 統 と 社 会 変 革	4-8 歴 史	4-13 芸 術	4-14 宗 教	4-15 ユ ー モ ア	4-16 言 葉・ こ と わ ざ	4-17 そ の 他	合 計 (秒)
2010	0	0	34	19	0	74	6116	0	0	0	0	6243
2011	0	1909	0	384	0	307	651	9	0	17	139	3416
2012	0	0	22	38	68	2079	2440	0	33	574	575	5829
2013	0	0	0	40	201	1626	3861	0	0	2425	498	8651
2014	234	0	0	0	0	802	601	0	0	0	0	1637
2015	0	0	0	0	0	54	724	0	0	0	0	778
合 計 (秒)	234	1909	56	481	269	4942	14393	9	33	3016	1212	26554

表 4 から、毎年取り上げられている項目は、「4-8 歴史、特に、歴史上重要な人物や出来事」と、「4-13 芸術（音楽、造形芸術、文学、演劇、ポピュラー音楽や歌）」であることがわかる。

最も取り上げられている項目は「4-13 芸術（音楽、造形芸術、文学、演劇、ポピュラー音楽や歌）」であるが、その中で取り上げられている項目は変化している。2010 年度は、文学作品を題材にフランス語を学ぶコーナーがあったので、文学作品や作家に関する事柄が多い。それ以降、文学はほとんど取り上げられなくなり、最近の映画や音楽に関する情報が放送されている。芸術に関するこの傾向は、フランスの現在の情報を伝えることに重点を置くことに、若者の視聴者層への興味関心を引きたてようとしているためと考えられる。

「4-8 歴史、特に、歴史上重要な人物や出来事」では、シャンティイ城やランスのノートルダム大聖堂などの歴史的建造物の歴史や、古い歴史を遺産として大切にする価値観などが取り上げられている。歴史ある古い遺産を映像によって学習者に提示することは、教科書や教師の説明によって提示されるよりも、学習者の印象に残る効果を望める。

「4. 以下の事柄に関する価値観、信条、態度」の詳細は付録 4 に記載している(4.4.地域文化は次に示すので除く)。

続いて、「4-4 地域文化」については2011年のみが提示している。これは、ネイティブにアルジェリア人の祖父母のもとアラブ文化の影響を受けた人を採用しているためと、「toc!toc!フランス語ワールド」というフランス以外のフランス語圏の国々を紹介するコーナーが設けられているためであり、スイス、チュニジア、アルジェリア、タヒチ、マリ、カナダのケベック、アメリカのルイジアナなどについて説明が行われている。マリについては、国そのものについては語られておらず、伝統楽器を紹介し、音楽面でのアフリカとフランスの文化的な相互影響を示すにとどまっている（2011年第21回放送）。この放送回はフランス文化の多様性が強調されており、フランスとアフリカの文化が混ざり合うことによる文化の豊かさを強調しているため、マリを代表とするブラック・アフリカ全体とフランスの相互影響を示している。表5に「4-4 地域文化」の詳細を示す。

【表5：「4-4 地域文化」詳細】

フランス語圏全体	「TOC!TOC!フランス語ワールド」、フランス語圏の紹介
	「TOC!TOC!フランス語ワールド」、富士セーヌ・フランコフォン(フランス語圏の戯曲を演じる劇団。マダガスカル、モロッコ、スイス、マルティニークの紹介。)
アメリカ	ルイジアナについて
スイス	「TOC!TOC!フランス語ワールド」、レマン湖、ジュネーヴ、グリユイエール、ラヴォー地区について 伝統料理ラクレット
チュニジア	「TOC!TOC!フランス語ワールド」、チュニジアについて 民族衣装コフタン チュニジアブルー、ジャスミンの花、ジャスミン革命 料理(なすのトマトソースの作り方)、ハリッサ(スパイス)、ブリック(パン) フランス語とアラビア語や、チュニジア文化とフランス文化は影響を受けあう
アルジェリア	お菓子ムスクチューとミントティー
カナダ	「TOC!TOC!フランス語ワールド」、ケベック、メープルシロップ、植民地の歴史 フレデリック・バック『木を植えた男』 モントリオールについて
タヒチ	「TOC!TOC!フランス語ワールド」、タヒチ、ゴーギャン、フランス語とタヒチ語使用されている、ヘイヴァ(7月に行われる最大の祭り)

	タヒチアンダンス(お祝いのときに踊る「アパリマ」「オテア」)
	アパリマというダンスのときに着る衣装
マリ	コラというマンデ族の楽器(西アフリカ)：牛の皮・胴はひょうたん・竿はローズウッド・弦は2本でできている
	アフリカとフランスのコラボレーション(文化的に受け入れる広さがある、フランスと地域文化が混ざり合うことで新しいものが生まれる)

この放送では、フランス語圏の様々な国や地域の、食事・歴史・芸術を取り上げ、フランス以外のフランス語圏の「文化」を伝えている。ただ取り扱われたのは2011年のみで、その他の年はフランス国内の情報に視点を集中している。これは、竹本(2010)で述べられているように、日本のテレビで扱われているフランス語関係の情報は、フランス国内の文化情報の発信がほとんどで、フランス以外のフランス語圏の情報は少ないという傾向に一致する。そのため、テレビフランス語講座を通して、フランス以外のフランス語圏の「文化」に触れる機会はほとんどない。

次に、フランス国内に目を向けると、毎年舞台となっている地方は異なり、パリだけでなく、ブルジュ、トゥールーズ、マルセイユ、リヨンと地方による違いも取り上げられている。これは、「フランス=パリ」の図式に陥ることなく、フランスの多様性を伝える放送を心掛けているためと考えられる。その一方で、やはり首都パリを取り扱う年は多いものの、今までのパリと違う姿を取り上げるとの説明がなされている。下記の3つの例は、パリを舞台とする年の第1回目の放送時に流れたその年の番組の説明部分である(下線部は筆者による)。

(例3)

ナレーター：2週間のパリ滞在。まずは市場で食材探しです。ホテルではなく、お部屋で簡単な料理を作ったり、1泊2日の小旅行も。友達と夜のパリを楽しんだり、習い事もできちゃいます。2週間の旅の終わりは友達とのホームパーティー。あらあら、デートまで。2週間の旅楽しみましょう。

(2010年 第1課)

(例3)は2010年の内容である。2010年は、一般的な日本人のパリへの旅行よりは長い2週間の短期滞在がテーマなので、観光ツアーとは違う実際のパリの生活に触れることがテーマである。そのため、観光地としてのパリを眺めるのではなく、習い事やホームパーティーなどをパリで体験して楽しむ方法を提示している。

(例 4)

(スタジオ)

ネイティブ：みなさんも良くご存じな街だと思いますけれども、今回ご紹介するパリは一味違いますよ。どうぞ。

(VTR：ここでは字幕のみ示す)

フランス首都パリ。年間 4500 万人もの旅行者が訪れる代表的な観光地です。でも、この番組が目指すのは「絵はがき」ではない「生のパリ」を体感すること。庶民的な地区にスポットを当て、フランスの日常の暮らしへいざないます。人生を楽しむ術を十分に心得ているパリジャンパリジェンヌたち。きっとあなたも彼らの人生哲学を深く知ることに！

(2012 年 第 1 課)

(例 4)は 2012 年の内容である。2012 年の講座はパリ、リヨン、マルセイユのフランス国内 3 都市の魅力を伝えることをテーマとしている。パリに関しては「絵はがき」として伝えられている観光地としてのパリではなく、日常の暮らしにスポットをあてて、パリでの生活を紹介している。

(例 5)

ナレーター：舞台はパリの中でも観光客があまり訪れない地元パリジェンヌならではの おすすめスポット。通の楽しみ方を伝授してくれるだけでなく、プライベートの過ごし方も披露してくれますよ。1 か月続けて見れば、それだけであなたも 1 つのシーンが克服できる。パリの通情報を楽しみながら、フランス語会話入門レベルをマスターしましょう。

ナビゲーター：マスターしたい！(拍手) 看板とか読みたいし、自分の好きなもの注文したいし、観光客が行かないあんな素敵などころがあるんだなと思いました。

ネイティブ：そうですね。いっぱいありますね。

(2014 年 第 1 課)

(例 5)は 2014 年の内容である。2014 年は、観光客が訪れない場所を取り上げ、通のパリの楽しみ方を伝えることがテーマとなっている。この年も観光地としてのパリを眺めるのではなく、実際にパリに住んでいる人が通う日常の場所の紹介にスポットがあてられている。

(例 3)から(例 5)の発言から、もっとも取り上げられることが多いパリに関しても、誰もがパリと聞けば想像できるような観光名所の情報ではなく、実際に生活をしてみなければわ

からないような日常の情報を伝えようとしていることがわかる。これはフランス語学習という枠組みを用いて、日本社会に定着している観光名所を中心とする憧れのフランスの「文化」ではなく、学習者と距離の近い日常のフランス「文化」を意図的に提示しようとするものだ。これは、テレビフランス語講座が憧れの対象を、観光名所ではなく、日常のパリを知ることにへと転換しているためと考えられる。とはいえ、パリの対する憧れを抱かせる点で、「文化」の発信の傾向は同じである。

e) 「5.身体言語」

「5.身体言語」に関しては、番組の中で説明されていない場合でもネイティブによって示されていた可能性もあるが、本研究は明示的な事項のみを扱うというマス・コミュニケーションの内容分析の手法に従い、ジェスチャーが表す意味について説明されている場合のみを計量した。その結果、「5.身体言語」はほとんど扱われていないことが判明し、これは、学習者が対象言語の文化で共通認識がなされているジェスチャーを自分で使えるようになる必要はないとみなされているためと考えられる。ジェスチャーは使えなくて困るという場合よりも、相手のジェスチャーが理解できない時に、意思疎通がはかれず困る場合が多い。またジェスチャーは人との交流の間で文化による違いが意識されるものである。しかしながら、「3.対人関係」でも述べたように、テレビフランス語講座はそこまでの人同士の交流を想定していない。そのため、相手のジェスチャーが理解できない時に、意思疎通がはかれず困るという場面がテレビフランス語講座にはない。したがって、「5.身体言語」も重要視されて取り上げられていない。

f) 「6.社会的習慣」

「6.社会的習慣」が毎年取り上げられているのは、フランスの挨拶の仕方として「ビズ」が毎年紹介されるためである。また、2012年はフランスの引っ越しと引っ越しパーティーの習慣を、2014年はホームパーティーのもてなし方ともてなされ方を紹介し、日本の習慣との違いを示しており、その項目にかかる時間数は多くなっている。

g) 「7.儀式時の立ち居振る舞い」

「7.儀式時の立ち居振る舞い」に関しては、2011年と2012年を除いて扱われていない。それは「3 対人関係」でも述べたように、番組内容が初級フランス語学習者を対象としているためと考えられる。これは、人との交流が多くなるにつれて出会うことが想定される項目と考えられる。したがって、テレビでフランス語講座では、そこまでの交流範囲での「文化」を紹介するに至っていないため、ほとんど扱われていない。

a)からg)の分析から、「文化」として「1.日常生活に関する事柄」と「4.以下の事柄に関する価値観、信条、態度」に多くの時間があてられており、その中でも、「食」、「買い物」、「移

動・交通手段」、「娯楽」、「芸術」、「歴史」に多くの時間をかけていることが判明した。これは、学習者にとって身近な項目であると同時に、学習者が実際にフランスを訪れた際に体験しやすい「文化」であるといえる。

また、ほとんど扱われていない項目は、「3.対人関係」、「5.身体言語」、「7.儀式時の立ち居振る舞い」であり、これらは、人間関係を形成する過程で重視される項目である。したがって、これらの項目が重視されていないのは、初級フランス語学習者を対象としているテレビフランス語講座では、交流相手が店員などに一時的な交流の相手に限られており、職場や友人関係などより深い人間関係の構築を必要とする相手との交流を扱っていないためと考えられる。

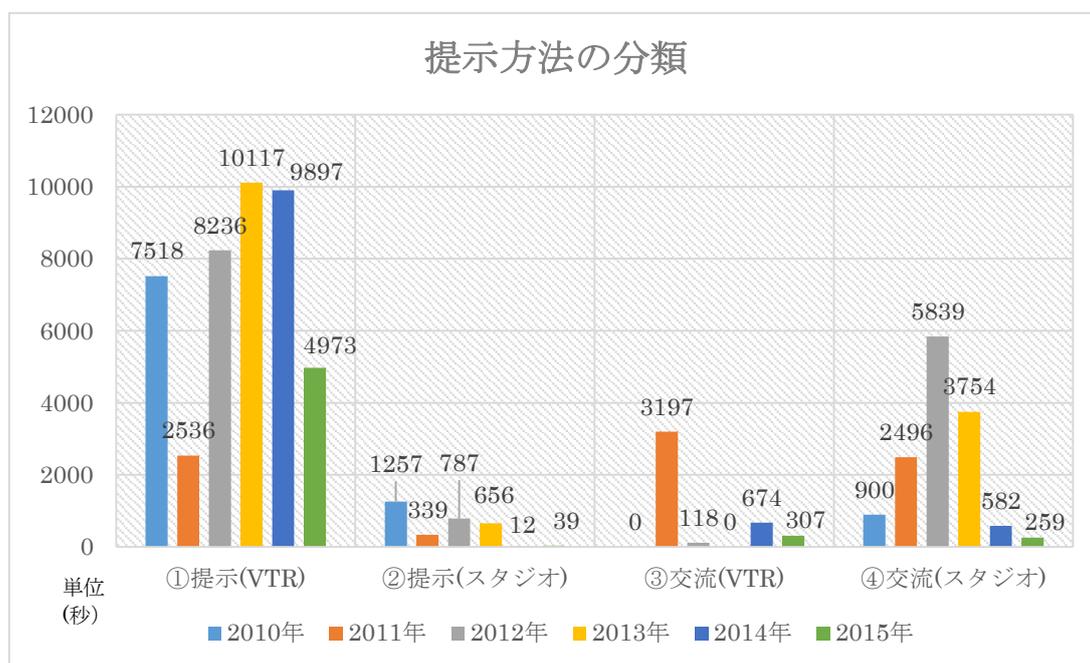
また、「文化」として紹介されている地域は、2011年のフランス語圏を紹介するコーナーを除き、すべてフランス国内である。フランス以外のフランス語圏の情報発信の少なさは、テレビフランス語講座にもあてはまる傾向である。フランス国内の「文化」は、パリを扱う年は多いものの、毎年のテーマに沿ってパリ以外の地域の情報も提示している。

扱われる頻度の多いパリに関しては、日本社会に定着している、パリの観光名所を中心とする憧れのフランスの「文化」イメージを示すのではなく、学習者と距離の近いフランス「文化」を意図的に提示しようとしている。しかしながらこれは、テレビフランス語講座が憧れの対象を、観光名所ではなく、日常のパリを知ることへと転換しているためと考えられる。そのため、パリの対する憧れを抱かせる点では、「文化」の発信の傾向は同じである。

4.2. 対象言語の「文化」の提示方法

この節では、対象言語に関わる「文化」の提示方法を分析する。番組で使用されている提示方法を4種類に分類し、対象言語の「文化」がどのような方法によって提示されているのかを分類する。①VTRによる提示、②スタジオ中での提示、③VTR中での交流、④スタジオ中での交流の4種類に分類される。「スタジオ」とは、放送形式が講師やナビゲーターなど出演者によってスタジオ内で番組が進行されている場合であり、「VTR」とはスタジオとは異なり、スタジオでの番組進行の間に挿入される映像である。「提示」と「交流」は3.2.2. 内容分析の方法の節で示した通りの定義で分類を行う。

図4は、4種類の提示方法に従う対象言語の「文化」の分類を示している。



【図 4：提示方法の分類】

図 4 からわかるように、①の VTR によって文化項目を提示する手法が一番多くとられている。VTR で提示されている内容は、フランスでネイティブの案内人が番組テーマに沿った内容を紹介するものである。映像によって現在のフランスを多く発信するというテレビの利点を多く採用することで、海外渡航の経験や外国人との交流経験が少ないために国外の文化との接点が限定されている学習者にも、限られた放送時間の中で多くの情報を提示でき、効率的に「文化」を伝えることができる。①の提示は 2011 年のみ極端に少ないが、これはその年のみ③の VTR の中での交流での提示方法が多いからである。それは、2011 年の VTR の内容が、日本人学生がブルジュにホームステイをしながら、フランス語とフランス文化を学んでいくというもので、交流を通して「文化」に気づいていく構成がなされているからである。

次に、④のスタジオでの交流を通して、出演者が「文化」についてやりとりを繰り返し広げる方法が多く用いられている。これは、スタジオにいる生徒役の日本人ナビゲーターと、ネイティブと講師の 3 名が、VTR で紹介された「文化」についての内容をもとに、スタジオでもその「文化」に関するテーマが取り上げられる構成を取っていることが多い。(例 6)は買い物物をテーマとした放送回からの抜粋である。

(例 6)

(VTR)

現地案内人：(日本語字幕)買い物終了。フランスのレシートの説明をします。

(レシートを見せる)

まず品名メキシカンベスト。値段 39,00 ユーロ。税抜き価格は 32,50 ユーロ。
フランスでは TVA(消費税)は 20%。ここでは 6,50 ユーロ。32,50+6,50=39
ユーロですね。分かりましたか？

(スタジオに映像切り替え)

ナビゲーター：高い！タックスが。TVA？20%！？

ネイティブ：そうです。でも実は、フランスではものによって消費税が違うんです。

ナビゲーター：ああ。

ネイティブ：ほとんどのものは 20%ですが、レストランや交通は 10%、で、スーパーで
食料品を買くと 5.5%になっています。

ナビゲーター：へえ。

(2015 年 第 1 課)

このように、①の VTR で提示する手法によって、限られた放送時間の中で多くの「文化」
を伝え、④の手法によってそれを改めて抜粋して取り上げることで、学習者への伝達を強化
し、またそれに関連した新しい文化項目を付け加えている。それにより、学習者は VTR で
発信された「文化」を他のテレビ番組のようにただ受け取るだけでなく、出演者のやり取り
を通して再認識することができる。この交流により、VTR の情報を他のテレビ番組のよう
に視聴するだけでなく、生徒役の日本人ナビゲーターと共に疑似体験としてフランス「文化」
に触れることで、現実の交流のように学習者自身がその「文化」について内省できる。

②のスタジオの中での提示は、ほとんどが講師やネイティブによって行なわれることが
多いが、この方法で提示されることは少ない。その中で 2010 年と 2012 年の時間数が増加
しているのは、この年はどちらも、フランス語既学習者でフランスへの留学経験もある日
本人タレントをナビゲーターとして採用しており、そのためにナビゲーターが「文化」を提
示する頻度は多いためである。しかしながら、全体的な傾向として、スタジオで「文化」が
提示される場合は、④の出演者の交流による。

これらの分析から、「テレビでフランス語」は「文化」を①VTR による提示を用いて多く
伝え、その次に④スタジオの中での出演者の交流によって、学習者にその「文化」を意識さ
せる方法で提示していることがわかる。

4.3. まとめ

1、2 節の調査結果をもとに、2010 年から 2015 年にかけての「テレビでフランス語」で
扱われている「文化」とその提示方法をまとめる。

「文化」として「1.日常生活に関する事柄」と「4.以下の事柄に関する価値観、信条、態
度」に多くの時間があてられており、その中でも、「食」、「買い物」、「移動・交通手段」、「娯
楽」、「芸術」、「歴史」に多くの時間をかけていることが判明した。これは、学習者にとって

身近な項目であると同時に、学習者が実際に体験しやすい「文化」である。

また、ほとんど扱われていない項目は、「3.対人関係」、「5.身体言語」、「7.儀式時の立ち居振る舞い」であり、これらは、人間関係を形成する過程で重視される項目である。したがって、これらの項目が重視されていないのは、初級フランス語学習者を対象としているテレビフランス語講座では、交流相手が店員などに一時の交流のみの相手に限られており、仕事や友人関係などより深い人間関係の構築を必要とする相手との交流の段階までを扱っていないためと考えられる。

また、取り上げられているフランス語圏の地域としては、フランス国内がほとんどであり、フランス以外のフランス語圏の文化への言及は 2011 年度のみ放送にとどまっている。

フランス国内に関しては、首都パリのみを扱うのではなく、他の国内の地域に視野を広げて多様なフランスを伝えている。

一方で、パリを取り上げる頻度は他の都市に比べてやはり多いが、観光名所を中心とする憧れのパリではなく、地元住民の視点から見た日常のパリを取り扱うことに力を入れている。

「文化」の提示方法は、テレビでフランス語は「文化」を①VTR による提示を用いて多く伝え、その次に④スタジオの中での出演者の交流によって、学習者にその「文化」を意識させる方法で提示していることが判明した。

5. 考察

本章では、テレビフランス語講座が発信する「文化」について、4章で得られた結果を中心として、「日常生活の『文化』」、「発信されている地域」、「提示方法」の観点から考察し、学習者がイメージするフランス「文化」を解明するとともに、文化学習への活用の意義を検討する。

まず、「日常生活の『文化』」の観点から考察する。テレビフランス語講座は「文化」として、実際に体験しやすい「文化」を発信する傾向があると判明した。そして、その「文化」はパリの観光名所を巡る体験ではなく、フランスの日常生活に触れることを指している。すなわち、テレビでフランス語は、1章の先行研究で述べたような、これまで日本人の若者に定着している、「憧れ」の「観光名所を中心とした」「『文化』が豊かな国」のイメージだけではなく、日常生活を中心に展開している。そのため、学習者は、観光名所にあふれた文化が豊かであるという漠然としたフランスの「文化」イメージを形成するに加えて、日常生活で接触する事柄や状況を「文化」として認識することになる。これは、学習者が将来フランス語圏を訪れることを想定して発信している「文化」であり、テレビフランス語講座は、それらの「文化」を映像で疑似体験的に伝えることにより、実際に学習者がフランス語圏を訪れる前の興味を喚起し、不安を軽減する役割を担っている。また、日常生活の「文化」の中でも、学習者にとって身近な「食」や映画や音楽などの「芸術」の項目を多く提示することで、日本にいながらにして実際に行動を起こしやすく、文化学習のモチベーションを高める効果も見込める。

しかしながら、日常生活の「文化」の中で人間関係の構築に必要な要素は、ホームパーティーでのマナーが示されたのみで、あまり扱われていない。これは、テレビフランス語講座が初級学習者を対象としている番組であり、人間関係を築く段階までの言語内容を扱うことができないためである。そのため、それらに関する「文化」を伝えることにもあまり時間がかけられていない。

Neuner(2003)は、外国語の教育と学習の2つの側面から社会文化的な内容を調査し、外国の表象は、社会文化的内容の提示(教育)と学習者の想像の中の外国世界の見方(学習)によって変化するものと分析しており、この表象を「*mondes intermédiaires*(中間世界)」と呼んでいる。そして、日常生活の経験に関係した社会文化的なテーマとしていくつか例を挙げており、その中に「*comment ils vivent avec les autres(famille, amis, compagnons, pairs, communauté, pays, etc...)*(どのように他人と生きるか[家族、友人、仲間、同僚、共同体、国など])」、「*comment ils communiquent entre eux*(どのようにコミュニケーションをとるか)」など人間関係の構築を必要とするテーマを挙げている。したがってこれらの要素は、学習者が学習を進め、フランス語圏を訪れる際やフランス語話者の人々と接する際には必要な要素である。

外国語教育における文化教育では、他者の文化を知識として知ることにとどまらず、そ

の他者と付き合い方を学ぶ「異文化間教育」の観点が重要視されている。したがって、学習者はテレビフランス語講座で発信されている体験を中心とした「文化」知識を学んだことのみにとどまらず、その「文化」の知識を基礎として、大学の授業や学習者の実際の文化体験によって他者との寛容な接し方を学ぶ言語学習につなげる必要がある。

次に「発信されている地域」の観点から考察する。「文化」として取り上げられている地域に関して、2011年のみフランス以外のフランス語圏を扱っているが、他はフランスのみを取り扱っている。したがって、学習者の中でフランス語圏の「文化」とはフランス国内の「文化」であり、他のフランス語圏のイメージする人は少ないだろう。フランス以外のフランス語圏に関しては、日本のメディアではほとんど取り上げられていないため(竹本,2010)、学習者は大学でフランス語の授業を履修する前にそれらにほとんど接触していない可能性がある。そのため、学習者のフランス語圏のイメージに関しては、大学でフランス語を履修してからほぼ授業を通して形成されることになる。しかしながら、フランス語の授業の中では、フランス語圏に関して十分な時間を確保することは難しい。映像によってわかりやすく「文化」を伝えることができるテレビを活用して、フランス語学習と関連深いテレビフランス語講座でこれらの項目を扱うことが望ましいだろう。

フランス国内に関して、首都のパリのみを扱うのではなく、他の地域に視野を広げて多様性のあるフランスを伝えている。一方で、パリを取り上げる頻度は他の都市に比べてやはり多い。しかしながら、観光名所を中心とする憧れのパリではなく、地元住民の視点から見た日常のパリを提示している。また、日常のパリを知ることが、観光名所のパリを知っているだけよりもその「文化」に精通しているというフランス観をうかがうことができる。したがって、憧れの対象が、観光名所への憧れから日常を知ることへと移っているのだが、学習者の抱く「文化」に憧れが付与されていることに変わりない。文化学習に関する肯定的な印象を発信することにより、「文化」に興味や関心を抱く学習者は、肯定的な「文化」のイメージを持ってフランス語学習にのぞむ。しかし行き過ぎてしまうと、パリの良いイメージに偏ったフランス「文化」のみ学習者は受信することとなる。その点に関しては、大学の授業によってテレビフランス語講座の「文化」とは別の視点で「文化」を伝え、バランスをとる必要がある。また、実際に他の地域のフランス語圏の人々から直接「文化」について聞くことができる機会があれば、学習者は他の地域のフランス語圏の視点から「文化」を眺めることができ、有意義なものとなるであろう。

最後に、「提示方法の観点」から考察する。テレビフランス語講座は「文化」をVTRによって提示する方法によって発信することにより、限られた番組時間の中で多くの「文化」情報を提示している。現在のフランス「文化」の中でも体験しやすい「文化」を紹介する映像をVTRにより多く放送することにより、直接的な文化経験が少ない学習者にとって、疑似体験的に「文化」を学ぶことができる。しかしながら、テレビの特徴のデメリットは一方的に情報を伝えるのみであり、視聴者との相互交流が行えない点にある。したがって、学習者が発信された「文化」をどのように受け取り、どのように解釈したうえで、「文化」のイメ

ージを形成しているのかは制作者や講師などは把握することができない。

しかしながら、テレビフランス語講座は、VTR で提示された「文化」について、スタジオの出演者が「文化」についてやり取りを行う手法を採用することによって、VTR で提示された「文化」を再認識することができるため、学習者自身が「文化」に気づき内省を進める効果がある。また、テレビフランス語講座は、日本人ナビゲーターとネイティブの交流によって「文化」が伝えられる際に、日本とフランスの2つの世界が想定されているため、対象言語の「文化」を発信していると同時に、学習者に彼ら自身の文化への意識化もうながしている。これは、他者と接触する態度を育成するために必要な異文化間能力の要素のひとつに通底する(バイラム,2015[2008])。したがって、テレビフランス語講座の出演者のやりとりを通して、学習者は「文化」を知識として受け取るだけでなく、自文化とフランス「文化」の間で、両方の視点から両方の「文化」を考えることも可能となる。

以上、この3つの観点からのテレビフランス語講座の発信する「文化」の考察を行い、学習者の抱く「文化」を明らかにし、文化学習への検討を行った。

言語教育において、社会文化的側面はメディア(教科書、図、ビデオなど)によって提示されることが多い。そのため、学習者が接触する外国世界は、必ずフィルターにかけられて作り上げられたものであり、それは学習者のいる世界の基礎をもとに構築された世界である(Neuner,2003)。したがって、テレビフランス語講座で伝えられる「文化」も学習者のいる世界を基盤として構築された世界を示している。学習者は現実の文化を基盤として外国の「文化」を受け取り、「文化」に興味や関心を抱き、言語学習に取り組む。このように「文化」認識の構造を理解し、メディアが形成する「文化」から対象言語の「文化」の一側面を学びつつ、授業や学習者自身の体験を通じて、対象言語の「文化」に気づき、理解を深め、その文化圏の人々との接し方を学びにつなげることが必要である。

6. おわりに

本研究では、テレビフランス語講座における「文化」を分析し、日本におけるフランス語学習者に対して、マスメディアがフランス「文化」をどのように発信しているのかを考察した。

まず第 1 章において、言語教育における「文化」の概念と日本人学生が抱くフランスの「文化」イメージを、先行研究に依拠しながら整理した。言語教育における「文化」の概念は、かつて「文化」とは教養文化を意味していたものの、コミュニケーション能力育成に向けた言語教授法の流れを受けて、コミュニケーションのための社会的文化的ルールの獲得へと変化し、その後複雑な社会政治状況とヨーロッパにおける異文化間教育の発展により、他者との相互理解のために他文化を意識化する枠組みへと変わりつつある。また、日本人学生が抱くフランスの「文化」イメージは、「憧れの、観光名所に満ち、文化が豊かな国」であることがわかった。

第 2 章において、テレビフランス語講座の歴史を概観し、特に 1998 年以降に、文化情報が毎回の放送で取り上げられる編成となってきたことがわかった。

第 3 章において CEFR (Conseil de l'Europe, 2001)の社会文化的知識項目を用いた分析手法を提示した。

第 4 章では第 3 章の手法で行った分析結果を示した。その結果、テレビフランス語講座は学習者が実際に体験しやすい日常生活の「文化」を発信しているものの、人間関係を形成する過程で重視される項目はほとんど扱っていないことが判明した。また、取り上げられているフランス語圏の地域としては、フランス国内がほとんどである。その中で、パリを取り上げる頻度は他の都市に比べてやはり多いが、観光名所を中心とする憧れのパリではなく、地元住民の視点から見た日常のパリを取り扱うことに力を入れている。「文化」の提示方法は、「テレビでフランス語」は「文化」を VTR による提示を用いて多く伝え、その次にスタジオの中での出演者の交流によって、学習者にその「文化」を意識させる方法で提示していることを確認した。これにより、視聴者との相互交流ができないという特性を持つテレビでも、学習者が「文化」についてある程度は内省し、自文化とフランス「文化」の間で、両方の視点から両方の「文化」を学習者自身も考えることができる。

第 5 章においては第 4 章で得られたテレビフランス語講座が発信する「文化」の結果について考察することで、学習者がイメージするフランス「文化」の解明を試みた。学習者は観光名所にあふれたフランス「文化」だけでなく、日常生活で接触する事柄や状況を「文化」として認識している。また、その「文化」に、観光名所の憧れではなく、特にパリの日常を知ることへと憧れを転換している。そして、それらの「文化」を VTR によって多く提示することで疑似体験として「文化」を学んでいる。これらの学習者がイメージするフランス「文化」を踏まえ、大学の授業での文化教育に関して検討した。

今後の課題として、テレビフランス語講座が発信するフランス「文化」の考察を深めるために、本稿で行った量的データの調査にとどまらず、質的調査の必要性を大いに感じた。したがって、出演者のセリフやコメントを分析し、どのような表現活動を通してフランス文化が表象されているのか、またこの「文化」はネイティブと日本人出演者との間で統一されているのかなどを考察したい。また、フランス語初級学習者にテレビフランス語講座視聴学習前と後で、フランス「文化」に対するイメージにどのような変化が見られるのか調査する必要性が挙げられる。実際にフランス語学習者へのインタビュー調査を行い、フランス「文化」のイメージを調査することにより、テレビフランス語講座が発信する「文化」との関係性を考察したい。さらに、NHKはテレビフランス語講座の他にラジオフランス語講座も放送されており、テレビによって視聴者の興味関心を引き立たせ、ラジオはさらに学習を進めたい視聴者向けに構成されているというように、完全にテレビとラジオの棲み分けがなされている。したがって、「文化」に関する放送内容が、テレビからラジオ講座への移行の過程でどのように扱われているのかを考察することで、メディアが発信するフランス「文化」の解明につながると考える。

謝辞

本稿の完成に至るまでに多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。

まず指導教員の西山教行先生に厚く感謝を申し上げます。西山先生には論文の起草から完成に至るまでたいへんご丁寧かつ熱心に指導していただきました。また、学会発表の機会を与えて頂くなど、数多くの勉強の場を与えて頂きましたこと大変感謝しております。

また、外国語教育論講座の先生方にも大変お世話になりました。田地野彰先生には大学院入学当初から研究のいろはを教えてくださいました。塚原信行先生には、研究計画や論文執筆に関する作法など多くのことを教わり、研究に対する姿勢を学ばせて頂きました。

そして、慶応義塾大学の國枝孝弘先生には、テレビフランス語講座の2010年度の貴重な映像資料を提供していただきました。ご協力のおかげで、EURO24 企画で構成された「テレビでフランス語」の6年分を研究対象とすることが可能となりました。

また、フランス語教育学会にて、京都大学名誉教授の大木充先生、大東文化大学の姫田麻利子先生、慶応義塾大学のパトリス・ルロワ先生には、テレビでフランス語の講師をご経験された立場から貴重なご助言を頂きました。そして、NHK 語学部の水谷陽子様と渡辺有珠様にも、番組制作の観点から研究手法に関してご助言頂き、研究の視野を広げることができました。また、大阪産業大学の今中舞衣子先生の発表を拝聴し、とても勉強させて頂きました。

研究を進めるにあたり、外国語講座の研究室の先輩方、院生の皆様にも大変励まされました。大山万容先生と葛茜先生、赤桐敦さんには、論文の構成や研究の進め方などご指導していただき、研究を支えて頂きました。

皆様に心より感謝申し上げます。

【参考文献】

欧文

- Bennett, M. J. (1997). How Not to Be a Fluent Fool: Understanding the Cultural Dimension of Language. In: A.E. Fantini (Ed.), *New Ways in Teaching Culture*. Alexandria, VA: TESOL, pp. 16-21.
- Brembeck, W. (1977). *The Development and Teaching of a College Course in Intercultural Communication. Readings in Intercultural Communication*. Pittsburgh: SIETAR Publications.
- Byram, M.(1992). *Culture et éducation en langue étrangère*. Paris: Didier.
- Canale, M.& Swain, M. (1980). Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*,1, pp. 1-47.
- Conseil de l'Europe(2001). *Le cadre européen commun de référence pour les langues : Apprendre, enseigner, évaluer*. Paris: Didier. [吉島茂・大橋理枝 他(訳・編) (2004) 『外国語教育Ⅱ－外国語学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社]
- Coste, D. (1994). Dépendant de la culture et non-dépendant de la culture. Stéréotypes et prototypes. In Coste, D. (ed.), *Vingt ans dans l'évolution de la didactique des langues (1968-1988)* . Paris : Didier.
- Cuq, J.P. (2003). *Dictionnaire de didactique du français langue étrangère et seconde*. Paris: CLE International.
- Holsti, O.R.(1968). Content Analysis. In Lindzey, G.&Aronson,E.(eds), *The handbook of Social Psychology Vol.2*, Addison-Wesley.
- Hymes, D. H. (1972). On Communicative Competence. In Pride, J. B., & Holmes, J. (Eds.), *Sociolinguistics*, Baltimore, USA: Penguin Education, Penguin Books Ltd., pp.269-293.
- Lázár, I., Huber-Kriegler, M., Lussier, D., Matei, G.S. & Peck, C. (eds.) (2007). *Developing and assessing intercultural communicative competence A guide for language teachers and teacher educators*, European Centre for Modern Languages.
- Levine, D.R. & Adelman, M. B. (1993). *Beyond Language / Cross-Cultural Communication*. (2nd ed.). Englewood Cliffs: Regents/Prentice Hall.xviii.
- Lüdi, G., Münch, B., Gauthier, C. (1994). Vers un enseignement pluriel de la civilisation dans le cadre du français langue étrangère. In Coste, D. (ed.), *Vingt ans dans l'évolution de la didactique des langues (1968-1988)* . Paris: Didier
- Neuner, G. (1997). Le rôle de la compétence socioculturelle dans l'enseignement et l'apprentissage des langues vivantes. *La compétence socioculturelle dans l'apprentissage et l'enseignement des langues*. Strasbourg : Conseil de l'Europe.

- Neuner, G. (2003). Les mondes socioculturels intermédiaires dans l'enseignement et l'apprentissage des langues vivantes. *La Compétence Interculturelle*. Strasbourg: Conseil de l'Europe.
- Neuner, G. (2012). The dimensions of intercultural education. *Intercultural competence for all Preparation for living in a heterogeneous world*, Council of Europe Pestalozzi Series, No. 2, Council of Europe Publishing.
- Pungier, M.F. (2007). Désirs de langues – du côté des étudiants, *Revue japonaise de didactique du français* 2(1), Études didactiques, pp. 196-214.

和文

- 有馬明恵(2007)『内容分析の方法』, ナカニシヤ出版
- 石丸久美子(2009)「日本とフランスにおける相互ステレオタイプの考察 一日仏学生へのアンケート調査の結果から」, *Revue japonaise de didactique du français* 4(2), pp.133-141.
- カーテン, ヘレナ. ペソラ, アン(著), 伊藤克敏・轟田公江・久保田信一・渡辺真澄・井手英津子(訳)(1999)『児童外国語教育ハンドブック』, [Curtain, H. & Pesola, C.A.B. (1994). *Languages and children: Making the Match*. New York: Longman.], 大修館書店
- カルトン, フランシス(著), 堀晋也(訳)(2015)「異文化間教育とは何か」, 西山教行・細川英雄・大木充(編), 『異文化間教育とは何か』, くろしお出版
- コスト, ダニエル(著), 倉館健一(訳)(2015)「複文化と異文化間能力」, 西山教行・細川英雄・大木充(編), 『異文化間教育とは何か』, くろしお出版
- 小平さち子(2008)「映像メディアの展開—テレビの登場そして未来」, 橋元良明(編), 『メディア・コミュニケーション学』, 大修館書店
- 佐藤卓己(1998)『現代メディア史』, 岩波書店
- 篠田一夫(1981)「テレビ・フランス語講座番組制作に参加して」『日本フランス語フランス文学会中部支部研究報告集』第5号, pp.18-19, 日本フランス語フランス文学会 中部支部
- 白根孝之(1964)『教育テレビジョン』, 国土社
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則(著)(2009) (初版 1999年)『改訂版 英語教育用語辞典』, 大修館書店
- ショールズ, ジョゼフ(著), 鳥飼玖美子・長沼美香子(訳)(2013)『深層文化 異文化理解の真の課題とは何か』, [Shaules, J. (2007). *Deep Culture: The Hidden Challenges of Global Living (Languages for Intercultural Communication and Education)*. Great Britain: the Cromwell Press Ltd.], 大修館書店
- 鈴木裕久・島崎哲彦(2006)『新版 マス・コミュニケーションの調査研究法』, 創風社

- 竹本江梨(2010)「テレビの中のフランスおよびフランス語圏—放送翻訳に見る番組制作の傾向と学生の意識—」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第 38 号, pp.123-145.
- 竹本江梨(2015)「多文化性の例示と異文化間理解への一歩—『パリ 20 区、僕たちのクラス』について、日本人学生の反応とその分析—」『名古屋外国語大学外国語学部紀要』第 49 号, pp.131-154.
- テレビ欄研究会(2009.a)『ザ・テレビ欄 0 1954-1974』, TO ブックス
- テレビ欄研究会(2009.b)『ザ・テレビ欄 1975-1990』, TO ブックス
- テレビ欄研究会(2009.c)『ザ・テレビ欄Ⅱ 1991-2005』, TO ブックス
- 西山教行(2015)「異文化間教育はどのように生まれたか」, 西山教行・細川英雄・大木充(編), 『異文化間教育とは何か』, くろしお出版
- 日本フランス語フランス文学会・日本フランス語教育学会(2012)「フランス語教育実情調査報告書」, 日本フランス語フランス文学会・日本フランス語教育学会
- 日本放送出版協会(1977)『放送 50 年史』, 日本放送出版協会
- バイラム, マイケル(著), 細川英雄(監修), 山田悦子・古村由美子(訳)(2015)『相互文化的能力を育む外国語教育』, [Byram, M.(2008). *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections*. Great Britain: the Cromwell Press Ltd.], 大修館書店
- 萩原滋 (2007)「大学生のメディア利用と外国認識」『慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』第 56 号, pp.5-33.
- 萩原滋 (2011)「越境する文化とテレビの役割—ウェブ・モニター調査(2010 年 2 月)の報告(1)—」『慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』第 61 号, pp.75-102.
- 樋口耕一(2014)『社会調査テキストのための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』, ナカニシヤ出版
- 姫田麻利子 (2003)「フランスのイメージとフランス語学習」『語学教育研究論叢』第 20 号, pp. 235-254.
- 姫田麻利子(2008)「フランス語教育における『文化』の転回、停滞、課題」『語学教育研究論叢』第 25 号, pp.193-218.
- 古田尚輝(2009)「教育テレビ放送 50 年」『NHK 放送文化研究所年報 2009』, pp.175-210.
- ブルデュー, ピエール.(1996) (1991 年 初版第 1 刷発行)『構造と実践 [ブルデュー自身によるブルデュー]』, [Bourdieu, P. (1987). *Choses Dites*. Paris: Les Éditions de Minuit], 藤原書店
- 細川英雄(2012)『「ことばの市民」になる—言語文化教育学—の思想と実践』, ココ出版
- ホフステード, ヘールト. ホフステード, ヘルト, ヤン. ミンコフ, マイケル(著), 岩井八郎・岩井紀子(訳)(2013)(1995 年 初版第 1 刷発行)『多文化世界[原書第 3 版]違いを学び未来への道を探る』, [Hofstede, G., Hofstede, G.J., Minkov, M.(2010). *Cultures and*

organizations : software of the mind : intercultural cooperation and its importance for survival (Rev. and expanded 3rd ed.) . New York: McGraw-Hill], 有斐閣

堀晋也 (2014)「フランス語学習者の動機づけー 他言語との比較および教育・学習環境との関連についてー」, 科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書『新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語教育枠の総合研究』

松浦依子・宮崎玲子・福島青史(2012)「異文化間コミュニケーションのための教育とその教材化についてーハンガリーの日本語教育教科書『できる』作成を例として」, 国際交流基金『日本語教育紀要』第8号, pp.87-101.

マクルーハン, マーシャル(著), 栗原裕・河本仲聖(訳)(1987)『メディア論 人間の拡張の諸相』, [McLuhan, M.(1964). *Understanding media : the extensions of man*. New York : McGraw-Hill] , みすず書房

山口誠(2001)『英語講座の誕生』, 講談社

ルッセル, フランソワ(著), 比気千晶(訳)(2015)「今日の日本での『外国語としてのフランス語』の授業で、文化的側面をどう考慮すべきか」, 吉島茂・Stephen Ryan(編), 『外国語教育Ⅶーグローバル時代の外国語教育』, 朝日出版社

NHK 放送文化研究所 (編)(1960-2016)『NHK 年鑑』

NHK テレビテキスト(2010)『テレビでフランス語』, 4月号-9月号

NHK テレビテキスト(2011)『テレビでフランス語』, 4月号-9月号

NHK テレビテキスト(2012)『テレビでフランス語』, 4月号-9月号

NHK テレビテキスト(2013)『テレビでフランス語』, 4月号-9月号

NHK テレビテキスト(2014)『テレビでフランス語』, 4月号-9月号

NHK テレビテキスト(2015)『テレビでフランス語』, 4月号-9月号

【web サイト】

・「旅するユーロ/NHK ゴガク」<http://www2.nhk.or.jp/gogaku/sp/euro2016/>(2016年12月13日閲覧)

【映像資料】

・2010年度から2015年度の4月から9月放送回の『テレビでフランス語』全24回の6年分144本(内、2010年の第5, 15回、2011年の第12回は入手不可のため除く)

【付録資料】

【付録1：テレビのフランス語講座の放送開始から現在まで】

(『NHK年鑑(1960-2015)』、NHKテレビテキスト『テレビでフランス語』(2015)、「旅するユーロ/NHKゴガク」を参照して作成)

年	タイトル	放送時間	講師	所属
1960 (4月から翌年3月までの区切り)	『フランス語初級講座(たのしいフランス語)』	火・木 pm.10:30-10:57 (第1回放送は1959年10月6日だが、記述は1960年から)	朝倉季雄	東京大学教授
1961	〃	火・木 pm.10:30-10:57	朝倉季雄	東京大学教授
1962	〃	火・木・土 pm.10:30-11:00	家島光一郎 朝倉季雄(4月～9月) 小林正(9月～3月)	東京外国語大学教授 東京大学教授 東京大学助教授
1963	たのしいフランス語	火・木・土 pm.10:30-11:00	家島光一郎(火・木) 小林正(土)	東京外国語大学教授 東京大学教授
1964	〃	火・木・土 am.7:30-8:00 pm.6:30-7:00(再)	家島光一郎(火・木) 小林正(土)	東京外国語大学教授 東京大学教授
1965	〃	火・木・土 am.7:30-8:00 pm.11:20-11:50(再)	家島光一郎(火・木) 小林正(土)	東京外国語大学教授 東京大学教授
1966	〃	火・木・土 am.7:30-8:00 pm.11:25-11:55(再)	家島光一郎 小林正 J・ゴンチエ	東京外国語大学教授 東京大学教授 日仏学院事務総長

1967	〃	火・木・土 am.7:30-8:00 pm.11:25-11:55(再)	丸山圭三郎(火・木) 小林正(土)	国際キリスト教大 助教授 東京大学教授
1968	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	丸山圭三郎(火・木) 小林正(土)	国際キリスト教大 助教授 東京大学教授
1969	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	丸山圭三郎(火・木) 小林正 渡辺守章(土)	国際キリスト教大 助教授 東京大学教授 東京大学助教授
1970	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	丸山圭三郎 渡辺守章	国際キリスト教大 助教授 東京大学助教授
1971	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	丸山圭三郎(火・木) 渡辺守章(土)	中央大学教授 東京大学助教授
1972	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	丸山圭三郎(火・木) 渡辺守章(土)	中央大学教授 東京大学助教授
1973	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	丸山圭三郎(火・木) 渡辺守章(土)	中央大学教授 東京大学助教授
1974	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	林田遼右(火・木) 渡辺守章(土)	立教大学助教授 東京大学助教授
1975	〃	火・木・土 am.8:00-8:30 pm.11:00-11:30(再)	林田遼右(火・木) 渡辺守章(土)	立教大学助教授 東京大学助教授
1976	『フランス語講座』	火・金 am.7:30-8:00 水・土 pm.11:00-11:30(再)	林田遼右	立教大学教授
1977	〃	火・金 am.7:30-8:00 水・土 pm.11:00-11:30(再)	林田遼右 宮原信	立教大学教授 東京大学助教授

1978	"	火・金 am.7:30-8:00 水・土 pm.11:00-11:30(再)	石井晴一 宮原信	青山学院大学助教 授 東京大学助教授
1979	"	火・金 am.7:30-8:00 水・土 pm.11:00-11:30(再)	石井晴一 清水康子	青山学院大学助教 授 津田塾大学講師
1980	"	火・金 am.7:30-8:00 水・土 pm.11:00-11:30(再)	曾我祐典 清水康子	関西学院大学助教 授 津田塾大学講師
1981	"	火・金 am.7:30-8:00 水・土 pm.11:00-11:30(再)	曾我祐典 清水康子	関西学院大学助教 授 津田塾大学講師
1982	"	火・金 am.6:30-7:00 土・日 pm.7:30-8:00(再) ・1年間を3期に分けて編成	加藤晴久 清水康子	東京大学助教授 国立音楽大学講師
1983	"	火・金 am.6:30-7:00 土・日 pm.7:30-8:00(再) ・1年間を3期に分けて編成	加藤晴久 清水康子	東京大学助教授 国立音楽大学講師
1984	"	水・土 am.6:30-7:00 月・木 pm.11:30-12:00(再)	加藤晴久ほか	東京大学助教授
1985	"	水・土 am.6:30-7:00 月・木 pm.11:30-12:00(再) ・番組後半の「会話の 実践学習」は前年度再 放送	加藤晴久ほか	東京大学助教授
1986	"	水・土 am.7:00-7:30 月・木 pm.11:30-12:00(再) ・番組後半の「文法の 基礎学習」は前年度再	加藤晴久 西永良成 清水康子	東京大学助教授 奈良外国語大学助 教授 国立音楽大学講師

		放送		
1987	〃	水・土 am.7:00-7:30 月・木 pm.11:30-12:00(再) ・番組後半の「会話の実践学習」は前年度再放送	西永良成 清水康子	東京外国語大学助教授 国立音楽大学講師
1988	〃	水・土 am.7:00-7:30 月・木 pm.11:30-12:00(再) ・土曜日の「文法編」は前年度再放送	西永良成 清水康子	東京外国語大学助教授 国立音楽大学助教授
1989	〃	水・土 am.7:00-7:30 月・木 pm.11:30-12:00(再) ・水曜日の「表現編」は前年度再放送	西永良成 小林茂 清水康子	東京外国語大学助教授 早稲田大学教授 国立音楽大学助教授
1990	『フランス語会話』	木 am.7:20-7:40 土 am.7:00-7:30 金 pm.10:20-10:40(再) 日 pm.7:00-7:30(再)	小林茂 清水康子	早稲田大学教授 国立音楽大学助教授
1991	〃	土 am.7:00-7:20 月 pm.10:20-10:40(再) ～前年度再使用～ 木 pm.7:20-7:40 金 pm.10:20-10:40(再)	牛場暁夫 清水康子	慶応義塾大学教授 国立音楽大学助教授
1992	〃	木 am.7:20-7:40 金 pm.10:20-10:40(再) ～前年度再使用～ 土 am.6:40-7:00 月 pm.10:20-10:40(再)	牛場暁夫	慶応義塾大学教授

1993	〃	木 am.7:20-7:40 金 pm.7:10-7:30(再) ～前年度再使用～ 土 am.6:40-7:00 土 pm.7:30-7:50(再)	西永良成 牛場暁夫 清水康子	東京外国語大学助 教授 慶応義塾大学教授 国立音楽大学助教 教授
1994	〃	木 am.7:20-7:40 金 pm.7:10-7:30(再) ～前年度再使用～ 土 am.6:40-7:00 土 pm.7:30-7:50(再)	西永良成 三浦信孝 清水康子	東京外国語大学助 教授 慶応義塾大学教授 国立音楽大学助教 教授
1995	〃	木 am.7:20-7:40 土 pm.0:20-0:40(再) ～前年度再使用～ 土 am.6:40-7:00 月 pm.11:30- 11:50(再)	三浦信孝 清水康子	中央大学教授 国立音楽大学助教 教授
1996	〃 再放送は前年度 使用	木 am.7:20-7:40 土 pm.0:20-0:40(再) ～前年度再使用～ 土 am.6:40-7:00 月 pm.11:30- 11:50(再)	三浦信孝 中井珠子 清水康子	中央大学教授 白百合女子大学助 教授 国立音楽大学助教 教授
1997	〃	木 am.7:20-7:40 土 pm.0:20-0:40(再) ～前年度再使用～ 土 am.6:40-7:00 月 pm.11:30- 11:50(再)	三浦信孝 中井珠子	中央大学教授 白百合女子大学助 教授
1998	〃	木 6:40-7:10 火 0:05-0:35(再)	大木充	京都大学教授
1999	〃	木 6:40-7:10 火 0:20-0:50(再)	大木充	京都大学教授
2000	〃	木 6:40-7:10 火 0:20-0:50(再)	大木充 生徒役：浜島直 子(モデル)	京都大学教授
2001	〃	木 6:40-7:10	大木充	京都大学教授

		火 0:20-0:50(再)	生徒役：井川遥 (女優) 出演： ドミニク・シャ ニョン パトリス・ルロ ワ	
2002	〃	木 6:40-7:10 火 0:25-0:55(再) 水 15:00-15:30	大木充 生徒役：仲根か すみ(タレント) 出演： ドミニク・シャ ニョン パトリス・ルロ ワ フランソワー ズ・ヒロタ	京都大学教授
2003	〃	月 23:10-23:30 木 6:00-6:30(再)	國枝孝弘 生徒役：池澤春 菜(声優) とりヒト(モデ ル) 出演： ドミニク・シャ ニョン パトリス・ルロ ワ ジャニック・マ ーニュほか	慶応義塾大学助教 授、
2004	〃	月 23:30-0:00 木 6:00-6:30(再)	國枝孝弘 出演：パトリス・ ルロワ ジャニック・マ ーニュ	慶応義塾大学助教 授、
2005	〃	月 23:25-23:50 木 6:00-6:25(再)	國枝孝弘 出演：パトリス・	慶応義塾大学助教 授、

			ルロワ、 ケティ・ローラ ン - ハルネッ ト、フレデリッ ク・ヴィエノ、 メリー・キョウ コ・ネザール	
2006	〃	(前期)月 23:25-23:50 (後期)月 23:35-0:00 木 6:00-6:25(再)	杉山利恵子 出演:ミカエル・ フェリエ、ジェ ニファー・ジュ リアン・イイダ、 フランツ=オリ ビエ・ゼーヴァ ルト	明治大学教授
2007	〃	水 23:30-23:55 土 6:00-6:25(再)	杉山利恵子 出演:ミカエル・ フェリエ、尾崎 右宗、ジェニフ ァー・ジュリア ン・イイダ、フ ランツ=オリビ エ・ゼーヴァル ト	明治大学教授
2008	『テレビでフラ ンス語』	水 23:30-23:55 土 6:00-6:25(再) 後期は 2005 年の再放 送	佐藤康 北村亜矢子 出演:沢井美優、 ヴァンソン・ジ リほか	学習院大学講師 上智大学非常勤講 師
2009	〃	木 0:00-0:25 土 6:00-6:25(再) 後期は 2008 年の再放 送	北村亜矢子(4月 ~9月) クリステル・ル・ カルヴェ 桑瀬 章二郎(7 月) 三浦篤(8-9月)	上智大学非常勤講 師 慶応義塾大学講師 立教大学准教授 東京大学教授

			出演:ロランス・ニコラ、ミゲル・クインタナ、クリステル・ル・カルヴェ、ジェシー・ルーセル、マリー＝ピエール・リコ、セドリック・リヴォー、髭男爵、三井シシル	
2010	〃	木 0:00-0:25 土 6:00-6:25(再) 後期は 2009 年の再放送	國枝孝弘 パトリス・ルロワ 出演:セリーヌ・アザイス 生徒役:知花くらら(タレント)	慶応義塾大学助教 慶応義塾大学訪問講師
2011	〃	水 23:25-23:50 水 13:30-13:55(再) 後期は 2010 年の再放送	清岡智比古 ジャンニック・マーニュ 出演:メディ・ネカシュ、ミレイ・ダンブロン 生徒役:黒谷友香	明治大学理工学部准教授 共立女子大学教授
2012	〃	水 22:25-22:50 水 12:00-12:25(再) 後期は 2011 年の再放送	川竹英克 出演:クロエ・ヴィアート、ギヨーム・ボ、マルタン・フェノ 生徒役:村治佳織(ギタリスト)	明治大学教授
2013	〃	水 22:25-22:50 水 12:00-12:25(再) 後期は 2012 年の再放送	川竹英克 出演:クリステル・ル・カルヴ	明治大学教授 慶応義塾大学講師

		送	エ、スプリーム 生徒役：真飛聖 (女優)	
2014	〃	水 22:25-22:50 水 12:00-12:25(再) 後期は 2013 年の再放送	姫田麻利子 出演：ピエール・ サンティヴ、マルゴ・マナン 生徒役：渡部豪太(俳優)	大東文化大学准教授
2015	〃	水 0:00-0:25 木 6:00-6:25(再) 後期は 2014 年の再放送 ・前期は 2015 年の再放送	姫田麻利子 出演：ヤシン・アキカ、オルファ・ベルーマ 生徒役：渡部豪太(俳優)	大東文化大学准教授
2016	『旅するフランス語』	水 0:00~0:25 月 6:00~6:25(再)	出演：常盤貴子 (女優)	講師不在

【付録2：『ヨーロッパ共通参照枠』 5.1.1.2 社会文化的知識】

1. 日常生活に関する事柄、例えば：
 - 1-1 食べ物や飲み物、食事の時間、食卓での作法
 - 1-2 公的祝日・勤務時間と仕事のやり方
 - 1-3 余暇の活動（趣味、スポーツ、読書習慣、メディア）

2. 住環境、例えば：
 - 2-1 生活水準（地域的、階級的、民族的な違いも含む）
 - 2-2 住宅環境
 - 2-3 福祉政策

3. 対人関係（権力関係や協調関係も含む）、例えば次のようなもの：
 - 3-1 社会の中の階級構成や階級間の関係
 - 3-2 異性間関係（ジェンダー、親密さ）
 - 3-3 家族構成や家族内での人間関係
 - 3-4 世代間関係
 - 3-5 職場の人間関係
 - 3-6 一般市民と警察や公務員との関係
 - 3-7 人種や地域間関係
 - 3-8 政治的および宗教的な集団間関係

4. 以下の事柄に対する価値観、信条、態度：
 - 4-1 社会階級
 - 4-2 職業的な集団（学者、経営者、公務員、技術者、労働者）
 - 4-3 財産（収入および相続）
 - 4-4 地域文化
 - 4-5 治安
 - 4-6 制度
 - 4-7 伝統と社会変革
 - 4-8 歴史、特に、歴史上重要な人物や出来事
 - 4-9 少数集団（民族的、宗教的）
 - 4-10 国民意識
 - 4-11 外国、外国人
 - 4-12 政治

4-13 芸術（音楽、造形芸術、文学、演劇、ポピュラー音楽や歌）

4-14 宗教

4-15 ユーモア

5. 身体言語

身体言語の使い方の慣習に関する知識は、言語使用者／学習者の社会文化的能力の一部を形成する。

6. 社会的慣習、例えばもてなしたり、もてなされたりするとき、以下の点：

6-1 時間に対する正確さ

6-2 贈り物

6-3 服装

6-4 飲み物、酒、食事

6-5 行動および会話における慣習とタブー

6-6 滞在時間

6-7 いとま乞いの挨拶

7. 儀式時の立ち居振る舞い

7-1 宗教的行事と儀式

7-2 誕生、結婚、死

7-3 公演や式典での観客や見物人の行動

7-4 祝典、祭り、舞踏、ディスコ、など

【付録 3 : 「テレビでフランス語(2010 年-2015 年)に出現する「1.日常生活に関する事柄」】

内容分析で使用したコーディングシート(表 2)の「(5-4)文化内容詳細」の項目をまとめた。この内容は、「テレビでフランス語(2010 年-2015 年)」内に出現する出演者とナレーターの発話と、字幕の文字情報を中心にまとめた。同じ年に何度も出現する項目に関しては、1 回のみ取り上げている。なお、表中に出現する「Le saviez-vous?」、「五感+ α café」、「ユーロ☆キッチン」、「Bon appétit France!」、「EURO24 比べてみれば」、「ユーロ☆くらしカル」は番組を構成する各コーナーの名称である。固有名詞など一部フランス語で表記し、日本語での説明を併記する。

1-1 食べ物や飲み物、食事の時間、食卓での作法

[2010]

食べ物や飲み物	夕食に、サラダのようにしっかりと食べることができて軽いものを選ぶ人もいる。
	クレーム・シャンティイ(シャンティイの名物デザート)
	フランス人はほぼ誰もがどんな種類のチーズも好きである
	チーズの種類を紹介
	日本人の約 20 倍年間でチーズを消費する。
	「EURO24 比べてみれば」 テーマ「10 ユーロで昼食を作ろう」、手長エビとルッコラのサラダ
レストラン	レストランでの注文の順番
	レストランでサラダを主菜に頼むフランス人も多い。
	アペリティフ(キール、ミュスカ、クレマン[ブルゴーニュのスパークリングワイン]など)
	アペリティフ(レストランでは注文しなくてもいい。レストランの前に友人宅で飲むこともある。)
	レストランでの会計
	レストランでは、パンは無料なので好きなだけ食べても良い。
	パリではさまざまな国の料理がたのしめる(アジア、トルコ、レバノン、ヴェトナム、クスクス、ミント入りお茶)。

[2011]

食べ物や飲み物	サクランボシロップとビール合わせた飲み物
	シロップを使った飲み物
	ブルジュはシロップで有名な町でいろいろな種類がある(ディアボロ[ザクロ]のジュースなど)

	ドレッシングはいつも自分で作る。
	フォレストィーナ(ブルジュ名物のキャンディー。外は固くて砂糖できている、中にはナッツのプラリネが入っている。)
	サンシオ(ブルジュ名物、クレープに似ている)
	朝食(黒イチゴジャム、クッキー、カフェオレを飲む器、タルティーナ、タルティーナをカフェオレに浸して食べる)
	タルティーナの食べ方
	リンゴのタルト(フランスの定番デザート)を家で作るとき、タルト生地は冷凍を使用する。カスタードクリームも手作り。
	デザートやお菓子はよく家で作る(リンゴタルト、ガトーショコラ、カトルカールなど)。
	お菓子(エクレア、ルリジュース、パリプレスト)
	シュークリームは家で作るもの。
	エクレアは日本の約2倍の大きさである。
	ウサギ料理
	サンドイッチにもバゲットを使用する。
	モロッコ料理。イスラム教の国では豚肉を使わない。フランス人はタジンが大好き。クスクスはフランス人が好きな料理2位に選ばれた。
	エスカルゴ(味は日本のサザエみたい)
	エスカルゴは白ワインと特別なバターと一緒に食べる。
	鶏の丸焼きは日曜に家族で食べるごちそうで、家で焼いてもローストしたものを買っても、オーブン(鶏丸ごと焼ける)で焼いたものでもいい。一家の主が食卓で切り分けて、みんなで参加して食べる。
料理の順番	料理の順番(前菜→メイン→デザート) 北アフリカの家庭では、料理はすべて一緒に出てくるが、最後はサラダを食べる。
食事準備・片付け	夕食は家族にとって一番大事な時間である。 テーブルクロスは多くの家で毎日きちんとセットされる。 テーブルクロスが家にたくさんあることも普通で、リビングで裸のテーブル見ることはまずない。 夕食の後の片付けは家族全員で協力する。 野菜を切るときはまな板を使わない。
食卓での作法	パンは食卓に直接に置き、お皿は基本的に一人一枚使用する。 食事の雰囲気として、フランス人は和気あいあいとした雰囲気を大切に、その雰囲気をシェアする。

食事時間	フランスは先進国の中で一番食事に欠ける時間が長い。
バー	バー
	バーやカフェのカウンター席
レストラン	モロッコ料理のレストラン

[2012]

食べ物や飲み物	ブーリッド(プロヴァンス地方の魚のスープ)
	ルイユ(マルセイユの名物のソース)
	カマルグの塩
	カスレ(フランス南西部[カステルノーダリ、カルカッソンス、トゥールーズ]の伝統料理)
	白インゲン(カステルノーダリ名物)
	フランスの郷土料理をフランス人はみんな知っていて、それを分かち合う。
	クスクスは全国で人気があるが、マルセイユは北アフリカの移民が多いので、とりわけおいしい。クスクスは学食にもあり経済的な料理である。
	夜遊びの最後の食べ物はクロワッサン
	パスティス(マルセイユ名物の食前酒)
	マルセイユのカクテル (シロップ×南仏のパスティス、「モレスク」「トマト」)
	「Le saviez-vous?」、テーマ「食べ歩き」、クレープ、ワッフル、焼き栗、ベニエ(ドーナツのようなもの)、バゲット、惣菜店
食事準備	エスカルゴ用のはさみ
食事作法	和やかな雰囲気をみんなで分かち合うことは食文化の中心にある。
レストラン	「Le saviez-vous?」、テーマ「ディナー」、大衆レストラン、夕食は長時間かかる。
カフェ	「Le saviez-vous?」、テーマ「カフェ」、カウンター席とテラス席と店内で値段がちがう。コーヒー1杯で何時間でもいることができる。un caféはエスプレッソのことである。
バー	マルセイユのバー

[2013]

食べ物や飲み物	「五感+α café」、テーマ「味覚」、フランス人は甘いものが好き。コーヒーに砂糖やビスケットも浸して食べる。小指立ててコーヒーを飲むのもエレガント。
	フランスでもボジョレーは「お祭りのワイン」であり、大学生は新学期をス

	タートさせているので、ワインを囲んで盛り上がる。
	ブション(リヨンの大衆食堂)、リヨンのブションは全国的に有名
	ジビエ料理、イノシシのテリーヌ
	カルドン(太いセロリ、リヨンの野菜)
	ソーセージ入りブリオッシュ(リヨン名物)
	ビュニユとプラリネ・ルージュ(リヨンのお菓子)
	Le Président(チョコのフリルのついたケーキ)、大統領の晩餐会に出された。
	ブルターニュはスパイスだけでなく塩も有名
	ファーブルトン(ブルターニュの郷土菓子)
	「ユーロ☆キッチン」、「温かいカナペの盛り合わせ」
	「ユーロ☆キッチン」、「子羊の骨付き背肉のグリル ローズマリー風味」
	「ユーロ☆キッチン」、「マイアミサラダ」
	「ユーロ☆キッチン」、「牛肉のビールソース」
	ガレットとカクテル(ペルージュの名物)
食事作法	「五感+α café」、テーマ「味覚、テーブルマナー」、スープは飲むものではなく食べるものとする。注文が決まったらメニューをテーブル上に置く。グラスに口紅が付くのは気になるので、先に口紅をナプキンでふく。会話の雰囲気共有できるかどうか大切である。

[2014]

食べ物や飲み物	カモのコンフィ
	フォンダンショコラ
	オス・ア・モアル(牛の骨髄、典型的なフランス料理)
	ココット(フランス家庭料理定番)
	フランボワーズケーキ
	フランスではサンドイッチをよく作る。
	ミルフィーユ
	北アフリカ・マダガスカル料理はパリでしっかり定着している(メッシュイアサラダ、ブリック、クスクス、タジン)。
	パリは食事について多文化である。
	野菜(チコリ、フェネル)
	塩味のフレンチトーストの作り方(料理教室)
	アリゴ (アヴェロン県の郷土料理、ジャガイモとチーズを合わせたもの)
	シャンパン(フランス名物)

	ピンクビスケット(ランス名物、ルイ 16 世の戴冠式のときに誕生)。シャンパンに浸して食べる。
	ハム (ランス名物、19 世紀から続くレシピ)
	「Bon appétit France!」、プロヴァンス地方食材①イワシのペースト、②オレンジとレモンのコンフィ、③アイオリ
	「Bon appétit France!」、プロヴァンス地方、ブーリッド(魚のスープ、アンコウ入れる)
	「Bon appétit France!」、ブルターニュの食材①シードル・ビネガー、②ゲランドの塩、③ソバ
	「Bon appétit France!」、ブルターニュ料理、le kig ha farz(ポトフ、ソバ粉生地)
	「Bon appétit France!」、ブルゴーニュ (ディジョン) 食材①パンデピス②マスタード③ブルゴーニュワイン
	「Bon appétit France!」、ブルゴーニュ料理、les oeufs de Pâques(イースターエッグ)
	「Bon appétit France!」、アルザスの食材①シュナップス、②フラムキーシュ、③シュペツェレ
	「Bon appétit France!」、アルザスの食文化はドイツの影響大
	「Bon appétit France!」、アルザス料理、fleischschnecke(フライシュシュネッカ=肉のカタツムリ)
	「Bon appétit France!」、カルカッソヌの食材①カモのコンフィ、②トゥールーズソーセージ、③タルブ産白インゲン
	「Bon appétit France!」、ラングドック・ルシオン名物、ワイン、フォアグラ、カスレ (もともとみんなが集まる日曜日に食べるもの)
レストラン	レストラン「Les fils de maman」、ママの料理を出す店
	レストランのテーブル テーブルセットがある席は昼食とる席で、テーブルセットない席は飲み物だけの席である。
	レストランでの注文の流れ メニューをもらい、食前酒を頼むか聞かれ、注文する。デザートは普通食後に選ぶ。
カフェ	カウンター席とテラス席で値段が違う。
	コーヒーの種類が多い。
	フランス、特にパリではカフェに行くのが日常である。
食事の時間	ゆったりと味わう。

[2015]

食べ物や飲み物	チーズの種類
	ワイン、ボーム・ドゥ・ヴェニスのミュスカはアプリコットに合う。
	アブサン(蒸留酒、ハーブで作る、画家のゴッホ魅了、近年まで禁止されていた)
	フランスではサンドイッチをよく作る。
	フランスではアジア料理の店増えている(しかし、レバノン、ギリシャ、トルコの方がフランスから近いので人気が高い)。
	14 区ダケール通りはパリらしい外国の食べ物のお店がある(ギリシャ料理 [ムサカ、ザジキ]、レバノン料理)。
	ペリゴールの郷土料理
	チーズ(ファンテーヌブローの紹介)
	野菜のガレット
	ラム酒とアクラ(アンティル諸島の料理)
	3 区にある Marché des Enfants rouges (パリで一番古い市場) では、パリらしくいろいろな国の料理が楽しめる(日本食やアンティル料理など)。
	Cheveux d'ange 「天使の髪」(モロッコのお菓子)
	ピカルディーでシードル作りをする。シードルを発酵させるカーヴを見学。
	ガトー・バテュ(ピカルディー名物)
	朝食(シャンブルドットは朝食付き。手作りのジャムなどがある。)
	ピカルディーのシャンブルドットでの田舎ならではの料理(ズッキーニのグラタンの作り方)
フィセル(ピカルディー名物)	
ムール貝のサリコンヌ添え(ピカルディー名物)	
食事作法	フランスでは食事中は会話楽しむもの。
レストラン	ビオ(有機栽培の食材扱う)の店
	パリのアンティル諸島料理のレストラン
	パリにはたくさん外食できるところがある。

1-2. 公的祝日・勤務時間と仕事のやり方

[2010]なし

[2011]

<p>ヴァカンスの過ごし方</p> <p>海も山もあるので国内で過ごすことが多い。別荘を持っていたりする。学生はバイトする人も多い。</p>
--

フランスの小さな店は週休 2 日のところ多く、たいてい日・月曜が休み。

[2012]

「Le saiviez-vous?」、テーマ「パリの夏」、ヴァカンス、7月14日は「革命記念日」

[2013]なし

[2014]

原則としてお店は日曜日が休み。しかし、最近では日曜日にも開店するお店が、少ないけれども増えている。

[2015]なし

1-3. 余暇の活動

[2010]

夜の過ごし方	レストランの後、コメディーフランセーズへ観劇に行く。
	「EURO24 比べてみれば」、テーマ「50 ユーロで夜の街に繰り出そう」、レストラン、バー、観劇、演劇(安い席なら 10 ユーロ)、ビールジョッキ 2 杯で 15 ユーロ、ルーラン・ルージュ
	夜の過ごし方、クラブ(日本と違って多くの人に開けている)
小旅行	「EURO24 比べてみれば」、テーマ「200 ユーロで小旅行」、シャンティイへ小旅行、料理、馬のスペクタクル、パリからはなれるのもいい
	アグリツーリズム
習い事	フラワーアレンジメント、フランスでとても人気
	ブーケづくり
	カクテルパーティーの講習
	香水作り
	パリの市役所ではアフリカダンスも開講されている
	「EURO24 比べてみれば」、テーマ「40 ユーロで習い事」、パリ 13 区にあるワインの試飲テイスティング教室
デート	「EURO24 比べてみれば」、テーマ「200 ユーロで極上デート」、リュクサンブール公園、バー、レストラン、アレクサンドル 3 世橋でのシャンパン
娯楽	ピクニック、公園で過ごす

[2011]

スポーツ	ペタンク
	ペタンクでは勝った人が負けた人に友情の一杯をおごる。スポーツである以上に友好を深める場である。
	フランスの乗馬クラブ

	乗馬はフランス 100 万人以上がやっている。7 割が女性である（日本も女性の方が多）。
	フランスでは乗馬は身近で安く楽しむ方法たくさんある。 子供もポニーから始める。
	「ユーロ☆くらしカル」、テーマ「健康のために気を付けていること」、フランスは欧州 4 ヶ国の中で「スポーツ」と回答した人が 1 番多い。
夜の楽しみ方	夕食後に映画を見に行く。夜遅くまでたくさんの人が映画館に来ている。日本よりチケットが安い。フランスではたいてい外国映画は吹き替えで上映される。
娯楽	ピクニック。ピクニックで持っていく敷物は食べ物のためで、自分たちは草の上に座る。

[2012]

スポーツ	パリのローラースケートイベントは、トゥールーズやマルセイユでも開催されている。
	「Le savez-vous?」、テーマ「パリの夏」、ツールドフランス
	フランスではサッカーと並びラグビーが人気がある。
	トゥールーズの人にとってラグビーは身近なスポーツである。
夜の過ごし方	夜遊び（特にパリ） 教会でコンサートが開催されていたり、夜に美術館が開館している日もある。
娯楽	公園の船あそび。フランス人はヨットが好き。
	カマルグ文化。闘牛。闘牛場では屋台が出て日本のお祭りのようである。
	「Le savez-vous?」、テーマ「海水浴場」、ヌーディストビーチ、パリプラージュ、フランス人はあまり泳がない。
	マルセイユ、プラドビーチは週末市民でにぎわう。

[2013]

夜の過ごし方	ローヌ川に浮かぶペニッシュ(平底船)の中は、バーやレストランになっていて音楽も楽しめる。フルヴィエールの丘から街の夜景を見る。
娯楽	テット・ドール公園、公園は日常生活がわかる

[2014]

小旅行	休日をパリ近郊へ旅行して過ごす。
アクティビティー	パリ南西部のレジャー施設でアクティビティー体験
	パリ 12 区ベルシー公園で体を鍛えるアクティビティーが提供されている。

	先生は元軍人やスポーツ選手である。
	日曜大工の体験教室 日曜大工は趣味の1つで、フランスでは古い家を大切にするため内装は自分ですることが多い。
	パリ市が食文化を守るためにマルシェで料理教室を開催している。

[2015]

アクティ ビティー	笑いヨガ
	謎ときツアー パリジャンに人気で、インターネットサイトで予約する。
	謎解きツアー(<i>passage couvert</i> [パッサージュ・クーヴェル]を中心に回るツアー)
	ピカルディーで農業体験 牛や鶏の餌やりの手伝いを体験する。
遊び	ビルボケ (=けん玉)

1-4. その他

[2010]

買い物	店の種類を紹介(薬局、食料品)
	マルシェ (魚屋、チーズ屋)
	マルシェの種類(鳥、のみの市)
	お店でプラスチックの袋はエコのためにはくれないので、自分で持っていかななくてはならない。
	タバコ屋
交通手段	パリの主な駅は7つある。そのうち、リヨン駅はフランス南部(リヨン、アヴィニオン、マルセイユなど)へ行く列車が発車し、北駅はフランス北部(リールなど)に行く列車が発車する。
	パリのモンパルナス駅(14.15区)
	駅の掲示板の表示 (フランスでは長距離列車と郊外列車は分けている)
	パリの地下鉄
	電車はよく遅れる。
	駅の窓口でよく待たされたり自動券売機壊れていたりもする。
その他	建物の階数の数え方

[2011]

買い物	タバコ屋 フランスで 3 万件ある。日本のコンビニ代わりみたいものでフランス人の生活には欠かせない。
	テレフォンカードの種類 アルオブレ市場はブルジュで 1 番大きい。
	マルシェ フランス人はマルシェが大好き。スーパーより新鮮なものが売っている。人とのコミュニケーションあって仲良くなれる。
	ちょっとした買い物でも小切手を使う。
	ブルジュのお菓子屋 ハーブは人気で料理や治療によく使う。
	交通手段 ブルジュ駅と電車
	洗濯
洗濯ものを乾燥した後は、しまいやすくするためにすべてアイロンがけをする。	
病気	体温計 お尻に入れて測る。フランスではその方が正確に測れると考えられている。
入浴	入浴手袋（体を洗うもの） 昔は機会が古くてシャワーのお湯がでなくなることがあったが、今はほとんどない。
	美容 エステサロン 脱毛はワックスで行う。眉脱毛は約 1 カ月間もつ。 エステは日常的なもので、若者だけでなくあらゆる年齢の人が利用する。フランス人女性は年齢重ねても女性でいたい。
その他	家に入る前に靴の汚れを落とす。 家の中では上履きを履く（日本のスリッパと違ってかかとがあるもの）。フランス人も一日中靴をはいているわけではない。

[2012]

買い物	パリ、ムフタール通り(チーズ屋、家具屋)
	パリ、プレゼント探し、写真屋
	パリ、ブキニスト

	パリ、有名ブランドの服を手ごろな価格で貸してくれる店
	マルセイユ、港の市場(魚屋)
	薬局(緑の看板)
	「Le saviez-vous?」、テーマ「キオスク」
	「Le saviez-vous?」、テーマ「お金」
	「Le saviez-vous?」、テーマ「買い物」
交通手段	vélib'(ヴェリブ、2007年開始、レンタル自転車)、autolib'(レンタル自動車)
	フェリーボート (マルセイユ市民の足、無料)
	「Le saviez-vous?」、テーマ「鉄道」
	「Le saviez-vous?」、テーマ「パリのタクシー」
	「Le saviez-vous?」、テーマ「ドライブに行こう」
	「Le saviez-vous?」、テーマ「パリの地下鉄」
公衆トイレ	「Le saviez-vous?」、テーマ「公衆トイレ」
郵便	「Le saviez-vous?」、テーマ「郵便局」
その他	「Le saviez-vous?」、テーマ「パリの住所」、住所の読み方、区はエスカルゴの形
	「Le saviez-vous?」、テーマ「パリの舗道」 街でのごみの分別はビンのみが別になっている。犬のふんに注意する。緑の清掃車が明け方に街をきれいにしてくれる。

[2013]

買い物	のみの市
	チョコレート店
	マルシェ (クロワルース市場、ヤギのチーズ屋)
	マルシェは日常を知ることができるので訪れるべき。
	薬草店 フランス人はよく利用する。フランス人は酔い止めにミントオイルを使う。
	リヨン中央市場 (パン屋、スパイス店、フォアグラスパイス)
	アンティーク店
	金運をあげるおまじないはフランスにはないが、ロト(宝くじ)が人気である。

[2014]

買い物	マルシェ 有機野菜果物店でお店の人に相談しながら買い物する。
-----	-----------------------------------

	パリ 13 区のジャンヌ・ダルク市場は地元の人に愛されている。
	パリ 10 区のサンカンタン市場は最大の屋内市場。
	スーパーマーケット ヨーグルトは個数の多く入っているパックを買った方が、1つ当たり値段が安くなる。牛乳の種類が多い。水はペットボトル 1 本だけ欲しい場合は 6 本パックを開けて 1 本取って良い。紹介されているスーパーマーケットでは、野菜は袋に入れて計量し、レジで支払いをする。
交通手段	Vélib'(レンタル自転車)の使い方
	パリのメトロの利用方法 (券売機での切符の買い方、チケットの種類、メトロにある地図)
	パリのメトロへ乗車 (行き先と乗り換え案内、メトロホームのデザイン、電車のドアの手動と自動、メトロミュージシャン、6 号線は地上に出るメトロ、工事のためいつでもどこかの駅閉鎖している)
	TGV でランスへ向かう。
	ランスのトラム(2011 年開始)
その他	街の標識の読み方
	パリの区はカタツムリ型

[2015]

買い物	パリ 2 区のヴィンテージもの扱う店 (服)
	ブティック
	手袋屋
	靴屋
	パリ 9 区のチーズ屋
	酒屋でワイン選び
	Kiosque théâtre(キオスク・テアトル)では演劇などの当日券が半額で売っている。
	パリ 14 区のお菓子屋
	消費税(TVA) フランスでは消費税は高いが、物によって異なる。ほとんどのものは 20% だが、レストランや交通は 10%、食料品は 5.5%である。
	靴のサイズ表示 (日仏で異なる)
交通手段	パリでのバスの乗り方 (路線図の読み方。機械に切符を刻印する。)
	レンタカーの借り方
	フランスの運転免許書

	ピカルディーのソナム湾鉄道
美容	ヘアサロン体験 マッサージチェア付シャンプーがある。髪の手干し方が下向きである。
郵便	絵はがきの書き方
	郵便の送り方 機械で vignette(郵送料のラベル)を買ってはがきに貼る。
その他	建物の階数の数え方

【付録 4：「テレビでフランス語(2010 年-2015 年)に出現する「4. 以下の事柄に対する価値観、信条、態度」】

以下の項目のまとめ方は【付録 3】と同じである。なお、表中に出現する「Le saviez-vous?」、「le français en chanson」、「五感+α café」、「ユーロ☆くらべてみれば」は番組を構成する各コーナーの名称である。

4-2 職業的な集団(学者、経営者、公務員、技術者、労働者)

[2010][2011][2012][2013]なし

[2014]

<p>パリのエベニスト（高級家具を扱う職人）の工房 椅子職人は少ない。職人の技は地域の中で受け継がれてきた。</p>
--

[2015]なし

4-5 治安

[2010]

<p>パリの治安 夜遊んで帰宅するときは注意すること[おおげさではなくパリと東京は違う]。 1人ならタクシーを使い、夜の公共交通機関の利用は集団ですること。</p>
--

[2011]なし

[2012]

<p>マルセイユの大規模開発は衛生状態悪い地域一掃する意味があった。</p>
--

[2013][2014][2015]なし

4-6. 制度

[2010]

結婚	PACS 制度 (1999 年開始)
----	--------------------

[2011]

学校	フランスの学校制度（特に高校）、バカロレア
	農業高校
労働	フランス人にとって、有給休暇は労働者が獲得した権利（1936 年から）なので、法的にも個人的にも大切なものである。
結婚	PACS 制度（1999 年開始） 性別と無関係に結婚と同等の権利を認める制度。 2011 年時点で世論の 58%が賛成している。同性カップル以外でも男女カップルの間で結ばれるようになる。

[2012]

セール	「Le saviez-vous?」、テーマ「買い物」 セールの時期は法律で決まっている。
-----	---

[2013]

学校	大学は入学するより卒業する方が大変なので、みんなまじめに勉強する。
----	-----------------------------------

[2014][2015]なし

4-7 伝統と社会変革

[2010][2011]なし

[2012]

社会変革	フランスは昔から無秩序状態を自ら組織しなおす力がある。
------	-----------------------------

[2013]

伝統	ファリュージュ(伝統的な学生の帽子)
----	--------------------

[2014][2015]なし

4-8 歴史

[2010]

パリ	コメディールフランセーズの歴史。今でもモリエールやボーマルシェの作品が生き生きと演じられている。
ルーアン	ルーアンの歴史
シャンティイ	シャンティイ城の歴史

[2011]

ブルージュ	ブルージュ市の郷土博物館
	ブルージュのマレ地区の歴史
マグレブ	マグレブ (チュニジア・モロッコ・アルジェリア) はかつてのフランス植民地だったので、フランスにもマグレブ出身の多くの人々がいる。
	お風呂の歴史。19世紀にパリのセーヌ川に銭湯船があった。
服装	<p>頭飾り</p> <p>19世紀、頭飾りは女性にとって社会的義務で、社会的にどういう人か(年齢や地位)を示す役割があった。</p> <p>昔はヨーロッパでは、ほとんどどこでも慎みから女性は髪を隠しており、今も地方の年配の女性は頭飾りを被っている人もいる。</p> <p>マグレブ出身者が頭飾りを被るのはイスラム教の関係であるが、必ずしも頭飾りはイスラム世界だけのものではないことがわかる。</p>

[2012]

パリ	モンマルトルの歴史 (テルトル広場、サクレクール寺院)
	パリ 4 区のボージュ広場の歴史
	パリのムフタール通りの歴史
	リュクサンブール公園の歴史
	14 区のダンフェール・ロシュロー広場のカタコンブの歴史
	「芸術橋」の歴史
シャトゥー	パリの西 10km のシャトゥーにある「印象派の島」のアルフォンヌ・ブルネーズ邸の歴史 (印象派画家支えた)
マルセイユ	サンシャルル駅の歴史 (大階段、19 世紀も今も玄関口)
	港の歴史
	ノートルダム・ドゥ・ラ・ギャルド寺院の歴史
トゥールーズ	「オック語」の歴史
	ミディ運河の歴史 (鉄道ができるまで街の産業を支える大動脈だった)
	サンテティエンヌ広場の歴史

[2013]

フランス	香りの歴史 昔は貴婦人が倒れたらアンモニア臭がせていた。
	遺産として歴史が大切にされている。「遺産の日」(9 月第三週末)があつて古い建物無料で公開している。
	歴史に対する考え方 lieu de mémoire 「記憶の場所」に行つて歴史学ぶ。
リヨン	旧市街
	リヨンのサンジャン大聖堂。14 世紀の時計が今も動いていて音も鳴る。
	リヨンのトラブール(建物と建物を繋ぐ小道)の歴史
	リヨンとレジスタンスの歴史、ジャン・ムーラン(レジスタンスの指導者)

[2014]

パリ	パリの街中に革命時代のパネルがある(当時牢獄で、住民に占拠され解体されたこと示すパネルなど)。
	看板と店が実際には違う建物がある(パリでは歴史的建造物保護するため改造禁止のところがあるため)。
	サンマルタン運河 全長 4.5km あり、25m の高低差を 9 つの水門で調整している。

	<p>混雑するセーヌ川の貨物船を移動させるために 1825 年に作られた。</p> <p>ブルターニュの歴史</p> <p>ケルト人が先祖でフランスでも異国であった。</p> <p>小麦が育たずソバを主食とする。</p>
ランス	<p>ノートルダム大聖堂の歴史</p> <p>13 世紀にできたゴシック建築の大聖堂。</p> <p>彫刻がたくさんあり、かつて文字読めない人は彫像を見て、聖書や神の世界知った。</p> <p>1260 年にできた扉や 1240 年当時のステンドグラスが残っている。</p> <p>ジャンヌ・ダルクがシャルル 7 世の戴冠式を実現した場所でもあり、25 人の王が戴冠式を行った。</p>
	<p>シャンパンカーヴ</p> <p>13 世紀の修道院利用。ボトルを手で回転し、おりを取り除く作業を行う。</p> <p>採掘によってカーヴができた。</p>

[2015]

ピカルディー	<p>Saint-Valery-sur-Sommers にはジャンヌ・ダルクの通った歴史ある城塞がある。</p> <p>アミアン大聖堂 (1288 年)、ゴシック様式</p>
--------	---

4-13 芸術

[2010]

文学	アルフレッド・ド・ミュッセ (ロマン主義、ジョルジュ・サンドとの出会い)、「愛のことば」
	ジョルジュ・サンド、「愛のことば」
	フレデリック・ショパンとジョルジュ・サンド
	サンドの館、サンドのそこでの過ごし方
	シモーヌ・ド・ボーヴォワール、『女ざかり』、「愛のことば」
	ジャン＝ポール・サルトル、『存在と無』、「愛のことば」
	ボーヴォワールとサルトル
	マルセル・ブルースト、『失われた時を求めて』、「愛のことば」
	ロラン・バルト、『恋愛のディスクール・断章』、「愛のことば」
	フランソワーズ・サガン、『悲しみよこんにちは』、「愛のことば」
	シモーヌ・シニョレとイヴ・モンタンとマリリン・モンロー、「愛のことば」
	ダニエル・ペナック、『人喰い鬼のお愉しみ』、「愛のことば」

	マルジャン・サトラピ、『ペルセポリス』、「愛のことば」
	コレット、『シェリの最後』、「愛のことば」
	コレット記念館
	ルイ・アラゴン、詩「エルザの手」、「愛のことば」
	マルグリット・デュラス、『これで、おしまい』、「愛のことば」
	ポール・エリュアール、「愛のことば」
	ロベール・デスノス、「愛のことば」
	ロベール・デスノスとユキ、世界大戦下フランスからドイツに送られた人の9割がドランシーを通過した。
	ジャック・プレヴェール、詩「ボンジュールのように簡単な」、「愛のことば」、ノルマンディーで最後を迎える
美術	パリ 9 区のロマン主義美術館
	トゥールーズ＝ロートレック、「愛のことば」、絵画
	マルク・シャガール、「愛のことば」、シャガールの終の棲家は南フランスのサン・ポール＝ド＝ヴァンス
	シャガール美術館
音楽	ジョルジュ・ブラッサンス、歌「独身主義のバラード」、「愛のことば」、恋人ピュッペチェン
	ブラッサンスは南フランスのセートで育ちパリへ出る。 セートにブラッサンス記念館がある。
映画	ジャック・ドゥミ、「シェルブールの雨傘」、「愛のことば」、妻と暮らした家
その他	ジャン・コクトー、『阿片』、「愛のことば」、サン・ジャック・フェラ（南フランスのニースから 20km）のサント・ソスピーール荘に滞在していた。サント・ソスピーール荘にコクトーの絵がある。
	フラワーアート作家のカトリーヌ・ミュラーはオペラ座内部も作品で飾ったことがある。

[2011]

音楽	アーティスト Tété
	アーティスト ZAZ
	アーティスト La Caravane Passe
	コラとチェロの演奏
映画	フランスは映画発祥の地。第七の芸術。ヨーロッパ最大の入館者数である。入場料は安い。「Fête de cinéma」のイベントのときはチケットを買ったら見放題になる。

	レア・フェネール監督作品「愛について、ある土曜日の面会室」(2009)
バンド デシネ・ 映画	ユン、『はちみつ色のユン』

[2012]

文学・ 映画	マルセル・パニョル、『マリウス』
映画	「エディットピアフ～愛の讃歌～」(2007)
音楽	バンド「IAM」、ボーカルはアケナトン
	エディットピアフ没後 50 年を機に制作された映画のピアフの声を、歌手のジル・エグロが担当した。
	中世音楽の演奏、楽器 luth(リュート)
	ドビュッシー「亜麻色の髪の乙女」、sensible(繊細な)、フランス語の世界で味わえるドビュッシーの音楽
音楽・ 舞踊	カマルグ地方(南フランス)のサント・マリー・ドウ・ラ・メールはフラメンコで有名である。カタルーニャとフランス南部は昔同じ文化圏だった。
美術	印象派
建築	ル・コルビュジェ、「輝く都市」
その他	パリ、モンマルトル、Je t'aime の壁

[2013]

映画	映画の普及と継承に力を入れている。
	リュミエール映画博物館
	ミニチュア・映画博物館
	エリーズ・ジラル監督作品「ベルヴィル・トーキョー」(2011)
	レオス・カラックス監督の新作「ホーリー・モーターズ」(2012)
	ジェレミー・レニエ主演作「最後のマイウェイ」(2012)
	ナタリー・バイ出演作「私はロランス」(2012)
音楽	「le français en chanson」、曲「Poupée de cire poupée de son」 フランス・ギャルはこの曲を歌い 1965 年のユーロビジョン・ソング・コンテストで優勝した。
	「le français en chanson」、曲「Une belle histoire」 ミッシェル・フュガンの曲。日本ではサーカスの「Mr. サマータイム」として有名である。

	「le français en chanson」、曲「Alexandrie Alexandea」 クロード・フランソワの曲で、フランス語でヒットした最初のディスコ曲である。
	「le français en chanson」、曲「Savoir aimer」 1997年フローラン・パニーが歌った「愛」がテーマの歌。全編手話で作られたミュージックビデオが当時話題になった。
	「le français en chanson」、曲「Andy」 1980年代に、個性的なパフォーマンスで旋風を巻き起こしたレ・リタ・ミツコのヒット曲。Andyという名の男の子を誘い出す女の子の歌。
	「le français en chanson」、曲「éblouie par la nuit」 ZAZの初アルバムに収録された2012年のヒット曲。「21世紀のピアフ」と称される力強くハスキーな声で都会の孤独と愛を歌う。
	フランク・シナトラが歌い世界中で大ヒットした名曲「マイ・ウェイ」の原曲は、フランス人歌手クロード・フランソワが作った曲である。
	Tryo : 1995年に結成された国民的4人組バンド
	フランスには社会的なテーマを歌う文化がある(自分の考え、今起きていること、政治など)。
	アンサンブル・アンテルコンタンポラン : 1976年にフランスの現代音楽を代表する作曲家ピエール・ブレイズによって作られたフランスの現代音楽に特化した楽団
演劇	リヨンのオペラ座 地方のオペラ座は、国際的共同制作をしているところが多い。
	オペラ あまり敷居高くなくなっている。tenue de soirée(正装)のときはプログラムに書いてある。
	ILOTOPIE : フランスのアート集団。水上劇を演じる。
人形劇	ギニョル(人形劇) はローラン・ムルガが生みの親で、1808年に誕生した。
	ポリシネル(ギニョルはポリシネルの影響を受けている)
	フランスの人形劇団 La pendue は、伝統的なポリシネルを現代風アレンジして演じる。
美術	だまし絵

[2014]

映画	パリの学生制作のショートフィルム 1 「Yuki à Paris」
	パリの学生制作のショートフィルム 2 「la coulée verte」

	パリの学生制作のショートフィルム 3 「REGARDE」
美術	バルテュスの生い立ち。展覧会の案内。

[2015]

映画	外国の映画は吹き替えで見る人が多い。
	パリでは 19 世紀の個人の邸宅を買い取って映画館にした場所がある。
	パリで映画を見ることはそれほど高くなく、割引がたくさんある。
演劇	モリエールやボーマルシェ
音楽	Brigitte(2011 年デビューの 2 人組歌手)はフランスで人気がある。
ダンス	Les Twins (ダンスユニット)
	Les Twins のワークショップ
装飾	フランス人の手ぬぐいの使い方(インテリアや装飾に使う。額に入れる。テーブルの上に置く。)
その他	収穫祭の展覧会 (ワインの樽にアーティストが絵を描く)
	パリのギャラリーで展覧会 (切り絵アート)
	18 区のお祭りのプログラム「Le carnival」では詩を音楽に載せて子供に教えている。
	ゲテ劇場 (外観は劇場だが、中は 2011 年オープンのデジタルアートセンター)
	デジタルアートセンターの「Foyer historique」は現在カフェになっている。新旧のミックスがいかにもパリらしい。

4-14. 宗教

[2010]なし

[2011]

マグレブはイスラム教なので今ではフランス第 2 の宗教となっている。

[2012][2013][2014][2015]なし

4-15. ユーモア

[2010][2011]なし

[2012]

フランス人は社会的な批判や政治的なテーマなどを笑いのネタにする。

[2013][2014][2015]なし

4-16. ことば・ことわざ

[2010]なし

[2011]

ことば	ロワールやトゥール（ブルジュも含む）の特に街中は、フランス語が美しいと言われている。
-----	--

[2012]

慣用句	食べ物の慣用句(キャベツ、ブリオッシュ、ウニ、じゃがいも)
ことば	madame(マダム)と mademoiselle(マドモアゼル)の敬称の使い方
	早口ことば
	マルセイユなまり
	ラグビーに由来したフランス語の表現がある。 troisième mi-temps 「第3のハーフタイム」: ラグビーの試合後にファンが集い一晩中歌ったり飲んだりするパーティーこと

[2013]

慣用句	「五感+α café」、faire un canard 「コーヒーなどに砂糖浸して食べる様子」
	「五感+α café」、clin d'oeil 「ウインク」 ①周りに気づかれないように「わかってるよね？」の合図 ②カフェで男性から女性に投げかけられ、ウインクを返したら OK のサイン ウインクには complicité(共犯関係)を築く意味がある。
	「五感+α café」、faire les yeux doux 「色目を使う、甘えた目つきをする」
	「ユーロ☆くらべてみれば」、Ce que femme veut, Dieu le veut. 「女性が欲しいものは神が欲しいものだ」 女性の求めるものを断るなという意味である。フランス社会の女性を立てる特徴が表現に現れている。
	「五感+α café」、jeter coup d'oeil 「ざっと見る」 フランス人と日本人の見方は違う。フランス人は見てないようで見ている。
	「五感+α café」、toucher du bois 「運が良い」、幸運を逃さないおまじない
	「五感+α café」、être bien dans sa peau 「自分の皮膚のもとで良い状態にある=(水を得た魚のように)しっくりくる」、se mettre dans la peau de 「～になりきっている」 皮膚は世界と自分を隔てる境界線であるため、その2つが上手く折り合うかどうかは皮膚の感覚でわかる。 心と体がちがうという発想が背景となっていることばである。
	「五感+α café」、Ça ne sent pas la rose. 「嫌なにおいがする」、花もらったら

必ず匂いをかぐ。
「五感+α café」、avoir le nez creux 「勘が良い」、金持ちや要人は鼻大きいといわれている(例えば、戯曲の主人公シラノ・ド・ベルジュラックなど)。
「五感+α café」、au parfum de ～「ある香りの中にある、何かの香りを嗅ぐ状態にある(=～を嗅ぎ取っている、～を知っている)」、goût は「味」で parfum 「味付け」のことである。
「五感+α café」、C'est toujours la même musique. 「いつも同じ音楽だ=いつも同じ話をする(ネガティブなイメージ)」、faire de la musique 「音楽をする=騒ぎ立てる」、changer de musique 「音楽を変える=話題を変える」 フランス語の音楽という言葉のイメージはいろんな使い方がある。 フランスでは会話を大切にするので、音楽はメインではなく雰囲気を変える役目を担うことが多いという感覚から使われている。
「五感+α café」、bouche à oreille 「耳にあてた口=ロコミ」 フランス人はガイドや雑誌よりロコミを信頼する傾向がある。 人と人との実際の会話を通して、情報を得ることが大切だと考えられている。
「五感+α café」、un bruit qui court 「走る音、うわさが流れる」、Les murs ont des oreilles. 「日本語の『壁に耳あり』と似ていて、大切な話をするときに周囲に聞かれないように気を付けないということ。」
「五感+α café」、Un ange passe. 「天使が通る(沈黙のときに言う言葉)」、La parole est l'argent, mais le silence est d'or. 「雄弁は銀 沈黙は金」(言葉があつての沈黙という考え方で、一種の言葉の戦略として沈黙が使われるという意味。)
「ポリシネルの秘密」とは公然の秘密のこと。ポリシネルの秘密守れない性格に由来する。
「五感+α café」、Quant on parle du loup, on en voit la queue. 「オオカミの話をするとその尻尾がみえる=噂をすれば影」 森の奥にいる見えない生き物は怖いので、子どもたちに危険なものを知らせるときにオオカミが使われる。 中世の時代、森は神秘的で怖い世界であり、オオカミには私たちの世界と向こうの世界を行き来する使者のようなイメージがあった。
La caverne d'Ali Baba 「アリババの洞窟」とは珍しいものがたくさんある家などのことである。
「五感+α café」、coup de foudre 「一目ぼれする」
「五感+α café」、tomber le ciel 「思いがけず手に入る=棚から牡丹餅」 ciel(空)は「天国」や「神様」と結びつき、カトリックの国ではいいイメージがある。

	ブルターニュでは、雷雨があると Dieu joue aux boules. (神様がペタンクをしている)という。
ことば	リヨンで街のあちこちにライオンのマークが見られるのは、Lyon(リヨン)とLion(ライオン)のことば遊びによるものである。
	「五感+α café」、「甘い」を意味する単語 sucré : sucre 「砂糖」に由来。「甘い味」のことで砂糖が入ったケーキの味に使う。 doux : 「なめらか」のような舌触りに使う。チーズやワインに使う。対義語は sec。例えば、un vin doux(甘口ワイン)⇔un vin sec(辛口ワイン)。Une femme douce(甘口の優しい女性)⇔Une femme sèche(辛口のそっけなく冷たい女性)。
	「五感+α café」、「触る」を意味する単語 toucher : 「触る、感動させる(心に触れるときにも使える)」 caresser : 「愛撫する、大事に扱う」 tapoter : 「赤ちゃんをよしよしする(子どもが泣いていてあやすとき)」
	Je t'aime. は大切な言葉だからあまり使わない。
	「ユーロ☆くらべてみれば」、テーマ「青のイメージ」 酔ったとき blanc(白)や vert(緑)を使って表現する (ドイツは青を使う)。
	「ユーロ☆くらべてみれば」、テーマ「青のイメージ」、 料理関連のことばにも bleu(青)を使う(cordon bleu[料理が上手い人]、fromage bleu[ブルーチーズ]、bleu[肉の焼き加減が超レア]など)。 新入りのことを bleu という。
	カップル互いの呼び方、mon chou の chou はシュークリームのイメージである。

[2014][2015]なし

4-17. その他

[2010]なし

[2011]

学問	数学大国フランス 数学者も多くフィールズ賞の受賞者も多い。 フランスでは数学が社会の役に立つという考えがある。 パリの区や地下鉄にも数字がふられており、県番号もある。
----	--

[2012]

産業	トゥールーズ、航空宇宙産業、シテ・ドゥ・レスパスの施設紹介 トゥールーズ、航空宇宙産業、CNES(国立宇宙研究センター)
----	---

	トゥールーズは航空宇宙産業の中心地で、学校もあるので留学生が多くやってくる。
	産業、すみれの街、すみれの加工品、ミディ運河で世界とつながる
スポーツチーム	トゥールーズのラグビーチーム「スタッド・トゥールーザン」(1907年にできた)

[2013]

産業	リヨン、絹織物産業
	リヨン、19世紀半ばからバラの栽培を産業化
	リヨン、「光の街」と呼ばれ、世界に先駆け1989年からライトアップが産業として進められてきた。12月8日は「光の祭典」が開催される。
スポーツチーム	リヨンの女子サッカーチーム「オリンピック・リヨネーズ」
大学	リヨン第3大学

[2014][2015]なし